兄妹愛とビターチョコ

婀凛栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
兄妹愛とビターチョコ

【Ｎコード】
Ｎ０６０７Ｅ

【作者名】
婀凛栖

【あらすじ】
ブラコン。世間の人々は私をそう呼びますけど、だから何？何か悪いことでもあるの？私が人に迷惑でもかけた？いや。別にかけていようがいまいが関係ないけど。とりあえず、先に言っておく。私は兄さんを愛しています――ってのにもうっ！

Prologue（上）

――好きだ。
「好きだ」
次は、愛してる。
「愛してる」
最後に決めゼリフ。
「だから――君と別れたくなんかない」
「……はいはい」
まったくもって予想通りのセリフに、思わず欠伸が出てしまう。
「――で？」
「……は？」
だから何よ、と。そんな私の答えに、川口先輩は唖然といったような顔で固まってしまった。いや。先輩。そんな愉快な顔してないでちゃんと私の質問に答えてよ。
「……どうして？　俺のどこがいけなかったのかな……？」
やっと返ってきた答えは、私へのアンタの疑問。いやいや、あのね。先輩。だから、訊いてるのは私なんだけど。
つーか、いい加減に飽々してくるわ。もともと、私はアンタと彼氏彼女の仲とか恋人同士だとかの仲になんかなった覚えもないつーのに。勝手にアンタが私の彼氏名乗って付きまとってただけじゃん。ぶっちゃけすごーく迷惑だったよ。こんちくしょー。
「俺は、前に七草が言ってた男の好みみたいなのに合わせたつもりだし。俺は俺で悪くないと思う。その辺の男なんかより俺の方が全然良いと自負しているよ。ただ、それでも七草がまだ俺に気に入ら

ないところがあるって言うならこれから直して――」
「いい加減、少しは黙れよ」
本当に五月蝿い。しかもさっきから聞いてれば本当に何様？　私の言った男の好み？　何よそれ？　私の好みなんて兄さんとしか言い様のないんですけど。
「私はアンタの彼女でも何でもないんだから。最初から別れるも何もないわ。ただ最近いろいろと付きまとってきてウザイから――消えろって言ってんだよ」
「何、言って……」
「だから、ウザイよ。アンタ」
動揺。困惑。混乱。
まぁ。普段の私のキャラは大人しい女子高生だからだろうね。こんなこと言うなんて思ってもなかったんだろうね。
「俺は……だって、お前が好きで……」
……馬鹿かしら。
自分が私を好きだから自分と私は恋人同士――何だそれ？　甘々な連続ＴＶドラマの見すぎじゃないの？
くだらない。私には甘すぎて吐気がするよ。先輩。つーか、
「そんなこと言い出したら付き合ってるやつなんてアンタだけじゃないし」
「――は？」
「私のことを『好き』とか『愛してる』とか言ってくれるやつなんてこの世にはごまんといるんだよ。例えばアンタの友達連中でもさ」
これでも私、顔には自信あるんで。それ以外はからきしだけど。
「なっ、な……」
「わかったらさっさと消えてもう私には関わるなよ。青春の無駄だよ？　女なんて私以外にもその辺歩いてんじゃん。それとも何？　そんなに女の子に飢えてんの？　それなら自分で自分を良い男なんて自負してるその素敵な顔でてきとーに女ひっかけて遊んでればいいじゃん」

「――っいい加減に……！」
殴られた。
しかも顔を、だ。
「お前に……お前なんかに……」
痛いよ。馬鹿野郎。
女の子の顔を思いっきり殴りやがって。訴えられるんじゃないかしら。これ。
まあ。何にせよ。これで、
「さよなら。先輩」
さすがに自分が殴った女の子と付き合うほどアンタも面の皮厚くないでしょ？　ね。良い男さん？
「……くそっ……お前に……お前……っ」
ばいばい。さよなら。二度と私の前に現れないでよ。
「――痛っ」
殴られた頬が熱を持って腫れてる。ああ。まったく。思いっきり殴りやがって。痛いよ。馬鹿野郎。
……。

Prologue（中）

……まったくもって、ウザい。
さっきからどいつもこいつも人のことをじろじろと見やがって。そんなに珍しいか。殴られた女の子ってのが。顔に痣を作った女の子ってのは。
あー。いらつく。
見せ物じゃないっつーの。私は。
「ただいまー」
私は浴びせられる注目から逃げるように家の中へと飛び込み、力いっぱいに扉を閉めて、自室へと駆け込み勢いそのままに全力でベッドにヘッドダイブ。何やってんだろうね。本当に。こんなまるでフラれたか弱いヒロイン地味た全然似合わない真似したってしょうがないじゃん。そもそもフったのは私なんだし。
今のこのもやもやした気分をどうにかするべく、気分転換でもとケータイを取り出し、またガックリ。
着信あり。しかも十七件。ついでに上から下まで全部川口先輩。音声メッセージあり。とりあえず再生。
『七草。殴ったのは悪かった。でもお前が――』
はい。しゅーりょー。これ以上はもう十分。どうせ私の言い方だの態度だのが悪かったっつーんだろうが。本当に五月蝿い。いつまでもぐちぐちと言ってんじゃねえよ。
川口先輩のアドレスと番号を拒否設定して机に向かってケータイをスローイング。ケータイは机の上に置かれた小物をその辺に弾き飛ばしながらガシャガシャと音を立てて机の上を転がった。
「……本当に、ウザい……」
さっきあんなに気持悪く『さよなら』したばかり。それが、何であんなに女々しく堂々と言い訳できるわけ？　しかもケータイで！

今時のメロドラマや少女漫画みたいなとことんハッピーな妄想にしか生きられない世界ですらケータイで言い訳なんてへたれた真似しないわよ。
ねえ。川口先輩。アンタがあんなに繰り返してた『愛してる』だとか『好き』だとかいう言葉はこんなケータイの留守電メッセージなんかで伝わるわけ？　アンタ本人が私に何度も繰り返しても『ウザい』としか伝えられなかった言葉はこんなんで意味が変わるわけ？　変わるわけないじゃん。ましてや伝わるわけがない。

――本当にウザいんだよ。

……ああ。くだらない。
何だって私はあんな男のせいでこんな気分にならなくてはいけないのだろう。別に私にはどうだっていいやつだったというのに。
私には、愛すべき人が他にいるというのに――何だって、あんなやつのことでこんなにも嫌な気分にならなくてはいけないのだろうか。
「ああ。本当に――もー……」
こんな時は、どうすればいいのだろうか？　この気分はどうしたらいつもの気だるく生優しい気分に戻ってくれるのだろうか……？
ねえ。兄さん――。

◆　◆　◆　◆

「……秋穂（あきほ）ちゃん。何もかけずに寝ると、いくら最近暖かくなってきたとはいえ風邪ひくよ」

「……ん」
私をまどろみから救い上げたのは、誰だろうか……。
「……ん？」
「だから、風邪をひくってば」
どうやら。いつの間にか、眠ってしまっていたらしい。　私の耳を撫でる何故か聞いているだけで心地よくなるこの声に名前を呼ばれながら、私は意識の覚醒を始めていた。
目を開けてみても、視界がまるで霞がかったようにぼやけてしまってよく見えない。枕に頭を押し付けるように寝ていたためだろうか。妙に視力が落ちたような気がする。
ぼやけた視界を頼りに、私は現在私に毛布をかけようとしているらしい手に何故か抵抗していた。いや。本当に何で抵抗してるんだろうね。私。
「ほら。だから、風邪をひいちゃうってば。大人しく毛布をかけられてから寝てなってば」
「んあー」
妙な声が出てしまった。
つーか、さっきから誰だよ。私に毛布をかけようとしてるやつは。寝惚けながら思考と縁を切ってる私の抵抗無視してかけようとするなよ。
「……まったく。少しはこのお兄さんの心配さ加減を減らさせてよ……」
……ん？　今何と……？　兄さん……？　って――。
「……兄さん……？」
「ん？　起きちゃった？」
だんだんと視力の戻ってきた目をぐしぐしと擦って、目の前の人物を確認。
……うん。間違いなかった。
毛布を両手いっぱいに広げながら、本当に何故だか嫌がっている私なかけようとしている――兄さん。

「――きゃあああああああああああああああああああ！？」
思わず私は叫んで。兄さんの手から毛布を奪い取り、おそらく今現在進行系で真っ赤になっているであろう顔を隠すためにそれにくるまった。だってしょうがないじゃん！
「人の部屋に勝手に入るなあああああああああああああ！！」
いや。別に兄さんならいいのよ？　家族だし。でもね。今のこの鬱モードで他の男絡みの私はダメなの！　つーか私寝てたじゃん！
兄さんがせっかく私の部屋に来てたのに寝てたじゃん！　恥っ！？　寝顔見られちゃったじゃん！　超恥ずかしいんですけどっ！？
「……えーと……ごめん？」
私がいきなり奇行に走って声をあげてしまったためか。兄さんは私に謝ってから半ば逃げるように私の部屋から出ていってしまった。
ああ。兄さんは全っ然悪くないというのに……。
本当に、何やってるのよ。私……。
「せっかく、兄さんが私に……」
思い出して。また赤面。
頬に手を当てると、火傷でもするんじゃないかというくらいに熱い。
まったく――本当にどうしてこんなに……私というやつは……。
「ああ、もう……！」
今日は厄日だ。仏滅だ。血液型ランキングではきっとB型が最下位で。星座占いでは魚座が十二位。ラッキーカラーは虹色とかわけのわからないもので。ラッキーアイテムはホワイトハウスくらい。いや。ありえないよ。ホワイトハウスはアイテムじゃないよ。建物だもの。どうでもいいけど。
とにかく。今日はそれくらい、どうしようもないというくらいについていないのだ。
「……後で兄さんに謝らないと……」
とりあえず、この顔に集まった真っ赤な熱が退いて、着たまま寝てしまいしわしわになってしまっている制服を着替えて、ボサボサ

になった髪を整えてから――ああ、ちくしょう……！

「兄さんに嫌われたらどうしよう……！」

Prologue（下）

「何パンチドランカーになったボクサーみたいに真っ白な感じで机に寝そべりながら塩素漬けのプールに放り込まれて死んだ金魚みたいな目してんの？　あとその顔の湿布はまたかい？」
説明ありがとう。今のは絶対に年頃の乙女に対する表現じゃなかったけど。
「ま。だいたいの理由はわかるけど言ってごらんなさいな」
「ちゃんと聞いてくれる？」
「当たり前」
「兄さんに嫌われたー……」
「あ。そっち」
「それ以外に何があるのよ」
「また男に殴られた、とか」
「何よ、それ？　そんなことよりも兄さんのことでしょ？　普通は」
「秋穂は、本当にお兄さん大好きだね。馬鹿みたいに脳みその容量がそれだけで埋まってる」
何よそれ。
まるでいつも私が兄さん絡みのことでしか悩んでないような言い方じゃない。
「違うの？」
「違わないけど」
ため息。ただし私からではなく、友人Ａから。
嘉島香織里（かしまかおり）。
男にみたいにサバサバとした話し方で、「恋は盲目、とはよく言ったものだよ」なんて詩人に皮肉を言う。本人はけっこう気にしているらしいが、傍目には羨ましいすらりとした長身。短く切り揃えた茶色いボブカットが妙に似合う私の友人。

「それで、今度は何をしたの？」
香織里は、あまり興味のなさそうにかったるそうな声で訊いてくるもので、私はそれに答える気がものすごーくそがれてしまったのだが、「ほら。早く聞かせてご覧なさいな。どうせ毎度毎度大したことじゃないんだろうし。アンタの思い込みとか妄想だろうし」とか何とか言ってくれるものだから、私はコイツに私の人生における重要な分岐点になりうるであろうこの問題を口にしなくてはならないではないか……！
「実は昨日兄さんに向かって怒鳴ってしまったのです！」
「いや。いつものことじゃん」
けっこう張り切ってテンション上げたっていうのに、この友人は『何やっちゃってんのコイツ』みたいな冷たい目で私を見るものだから、私はさらに言葉を続ける。
「そしてそのお詫びに兄さんがお風呂に入っているところに突入して『お背中流しまぁす』どころか全身くまなく流すつもりで――」
「ちょっと待て。アンタ、全身……？」
「くまなく」
そりゃあ、もう。あーんなとこやこーんなとこまで。だというのに、兄さんは顔を真っ赤に抵抗して可愛かっ――じゃなくて、逃げてしまったのですよ。せっかく可愛い妹様が『一緒にお風呂入ろー！　ついでに兄妹の一線越えちゃおー！』って感じで入っていったってゆーのにー……。
「アンタ……そりゃあ、アンタが悪いって……」
「？　何でよ？」
こんなの、別に兄妹としてのスキンシップみたいなものじゃない。昔はよく二人でお風呂に入って洗いっこしたものよ。それこそ全身くまなくあーんなとこやこーんなとこまでお互いに激しく擦りあわせて……あーあの頃の兄さんは可愛かったなぁ。今はさらに可愛い過ぎるけど。まあ。あの頃、幼稚園くらいの頃とで比較してもしょうがない。可愛いものは可愛いのだから、しょうがない。

「なんつーか……ブラコンにも程ってもんがあるでしょ。ふつー」
「五月蠅いわよ」
ブラコン。
なんて、良い言葉じゃない。つまりそれは兄妹愛でしょ。マザコンってのは見てて個人的にどうかと思うけど、いーじゃん。ブラコン。私お兄さん大好きな妹ちゃんだもの。
「あたしから見たらブラコンもマザコンもシスコンもファザコンもロリコンも変らないと思うけどね。所詮は全部『コンプレックス』でしょ？　劣等感よ、劣等感。あたしは何でそんなものをアンタがふつーに誇れるのか物凄く気になってしかたがないよ」
「……む。コンプレックスって劣等感って意味だったの……？」
「……アンタ、何だと思ってたのよ？」
「いや。ブラコンだのロリコンだのとあるものだから、てっきりラブの活用形とか形容詞とか名詞とかなんかそんなものかと……」
「うん。わかった。今アンタがアンタのお兄さんに嫌われているらしいことを利用して今日からみっちりと英語をレッスンしてやる」
「うわぁ……迷惑……」
何というか、ダメだコイツ、みたいな顔をされてしまった。
だってしょうがないじゃん。勉強大っ嫌い。スポーツ大っ嫌い。ピーマン大っ嫌い。大っ嫌いったら大っ嫌い。好きなものなんて――言うまでもない。
「アンタね。このまま勉強嫌だの嫌いだの言っていつのまにかあたしの後輩になってもしらないからね」
「いいよ。その時はその時で。よろしく。香織里先輩」
「秋穂。アンタの場合、本当に冗談にならないから怖いわ……」
……いや。そんなに嫌そうな顔をしなくても……。そりゃあ、私の成績は御世辞にも良いとは言えないけれど、赤点は何とかギリギリのラインで上回ったり下回ったり――最終的には先生に頭下げて追試をさせてもらったりレポートを書いたりで何とかなっているというのに……。

「いや。アンタね……。あんまり成績悪いと、アンタの目標にしているお兄さんと同じ大学に行くっていうのも難しくなるんじゃん？」
「あ」
そういえば、そんな目標が私にはあった。つーか、
「アンタのお兄さん。めっちゃ頭いいじゃん。下手するとあたし以上に」
「それはもう、私の自慢の兄さんですから」
兄さんの頭は、正直な話。この学校ではもったいないくらいに頭が良い。本人はこの学校を近いからというだけの理由で選び、そしてそのまま進学したらしい。私は兄さんの入学が決まってからこの学校に入るために死ぬ気で勉強して何とか入ったというのに……。
「つまりアンタの偏差値とは雲泥の差があるわけだ」
「ぐっ……」
反論、できません。
「まあ。でも、アンタも別に頭が悪いというわけではないとは思うんだけどね。文法とかは別に何の問題もなく理解してるし。数学だけなら私と同じくらいはできるし。なんつーか……本当に勉強不足なだけ？　やればできる子なんじゃないの？」
いや。そんな無駄に伸ばした言い方されても。あと今の言い方だと私が頑張らない馬鹿な子みたいじゃない。そうだけど。――って、
「ん？　そういえば……何か話が色々と変ってるけど――けっきょく私はどうすればいいのよ……？」
「んー……あー……考えてない」
うん。それは何となくわかってるわよ。私も考えてなかったもの。
「まあ。アレだ。とにかく……勉強でもしてみたらどうだろう？」
いや。どうしてよ……？
……。

◆◆　◆◆

「だー……」
「ほら。アンタ、学校生活の貴重な一日をけっきょくこんなうなだれたまんま過ごしていつまでもうだうだうなってんじゃねーよ」
蹴られた。
完全に不意打ちであったために、私の体はぐらりと揺らいで倒れて大転倒。
「……」
「えーと……ごめん……？」
ゆらりと無言で立ち上がり、わざとらしくぱんぱんとと音を立てて埃を払いつつ、睨む。香織里が何か面白いくらいビビりながら私に何事か声をかける。周りが何事かと見ている。――うん。いや。ねえ。どいつもこいつも……。
「秋穂……さん？　無意味に無言でそんな目で見られても……？」
ほら、周りが見てるし、とか言ってた。でも、ぶっちゃけそんなんどうでもいい。つーか、いちいち人のことを見てんじゃねえよ。私は見せ物なんかじゃねえし。本当にどいつもこいつも――人がブルーな気分とイライラした気分と勉学への焦りを覚えた初日の気分で知恵熱起こしそうだっつーのに――。
「おい……おいおい……！　何かヤバいぞ！？　おまっ！？　まさかこんなとこで暴れ――！？」
「香織里……とりあえず貴女から――」
――ＲＲＲＲＲＲＲ……。
「あら？」
「お？」
不意に鳴り響いたのは、そういえばマナーモードにし忘れていた、私の携帯電話。そしてこの着メロは――

「――兄さん！」
『ふぇっ――あ。はい。兄さんです』
電話の向こうから聞こえるどこか抜けた、のんびりとした、間違いようのない、兄さんの声。
「兄さん兄さん兄さん兄さん！」
『え？　え？　なに？　どうしたの？　もしかしてまた何かやっちゃった……？』
「やってない！　まだ何もやってないわよ！」
『……まだ？』
どうやら私の言い方に少し引っ掛かったものがあるらしい。でも、本当に、まだ、ですけども。
『まあ。別にいいけどね。ところで、秋穂ちゃん、帰りに買い物に行くんだけど色々と買いたいものがあるから付き合ってくれる？』
「つ、付き合って……！」
『あ。何か別に予定があるなら――』
「喜んでっ！」
断る理由が、あるわけがない。あったらそれを押し抜けて、捻り潰して、なかったことにしてやる。だって、兄さんから、つ、付き合って――誘ってくれて……！
『そう？　あー、よかったー。秋穂ちゃん朝から何かおかしかったから怒ってるかと思って……』
「へ？　怒る？　私が？」
何のことだろうか。
『秋穂ちゃん、昨日のこと気にしてたりしてるんじゃないかなぁ、と思って。昨日はちょっと言い過ぎたな、って。謝ろうとは思ったんだけど。秋穂ちゃん、朝なにも言わずに、いつもより早く出ていっちゃったから。ちょっと気になって――』
お？　おおお……？　それはつまり、兄さんは私の心配をしてくれていたと？　別に私を嫌いになったわけではないと？　むしろ私のことを気にしてくれていたと……？

――私、嬉し過ぎて、死にそうです……！

『秋穂ちゃん？　もしもーし。聞こえてる？』

「は、はい。もちろん！」

『うん。ちゃんと聞いてるならいいや。じゃあ、校門で待ってるからね』

「はい！」

さあ。早くこんな汚い教室はあとにして兄さんの待つ校門へ――

と、思ったのが、

「……何よ？」

「……別に」

なんか、香織里がものすごく疲れているような目で私を見ていた。何だろう。

「いや。別にじゃないでしょ。何かとても酷い顔してるわよ？」

「ん。たぶん、アンタの中での色々な優先順位とか極めて単純に作られた構造とか、アンタのお兄さんの偉大さを見ちゃったせいね……」

そう言って、香織里は肺の空気をすべて吐き出すような、長く深いため息をついた。

「本当に、アンタのお兄さんは大した人だよ」

そして、香織里は、私にとっては至極当然のことを、吐き出したため息に乗せて呟いた。だから、

「当たり前じゃない。だって――」

私は、

「私だけの兄さんだもの」

当たり前のことを言ってやった。兄さん大好き。いえーい、って感じで。

Prologue（下）（後書き）

本作品は作者の妄想とか煩悩とか一握りの浪漫をブレンドさせたラブコメ（予定）の小説であります。

つーか、ブラコンな妹様の日常です。ラブもくそもないのです。実は。

ちなみにそんな作者は現在部活に向かう電車に揺られながら、立ったままケータイ画面と睨めっこ中です。酔いそうです。酔いました。吐きそうです。うわーい。吐きませんけど。

さて、と。前半にかなり無駄の多い後書きとなりましたが、本作『兄妹愛とビターチョコ』はいかがでしたでしょうか？　とは言っても、まだ始まったばかりなのですし。別の作品『殺人鬼とペーパーナイフ』の方の更新サボって書いてるくせに遅筆な私の作品ですから。まあ。気長に見守って下さい。

では、また次回の後書きにて――。

Don't disturb!

少し前まで。
私は全力で廊下を走り、兄さんの元へと駆けていた。過去形。現在停止中。
なぜなら、
「――七草！」
呼び止められた。しかも、よりにもよって、
「……川口先輩……」
川口先輩は、その大柄な体で私の行く手を塞いで、どこか寂しそうな感じの、まるで捨てられた犬みたいな目で、私を見つめていた。
「七草、俺の話を、ちゃんと、聞いてくれ」
川口先輩は、一単語ごとに、聞き分けの悪い子供にしっかりと言い聞かせるように、力の込めて吐き出した。
……何だろうね。本当に。この人、まさか昨日の今日でまともに話し合いなんかできるとか考えてんじゃないだろうか。
しかも、私が道を塞がれうろたえたのを良いことに。川口先輩はべらべらと長いお話を始め出してしまった。何でも「昨日殴ってしまったのは悪かったと思っている。でも――」と始まり、「お前が悪いんだ。お前が他の男に――」と責任転嫁を始めて、「そもそも俺達の関係は――」と何か勝手に付き合っていたことにされた挙げ句。「――だから、」
「だから？」
「やり直そう」
何とも自分勝手に話をすすめて結論付けてくれやがりました。は

い。めでたし、めでたし。いや。めでたくないけど。特に私が。
「……ダメ、だろうか……？」
「本気で言ってるんですか？」
「当たり前だ」
冗談。
まともな話し合いができるとかどうとか、それ以前の問題じゃない。コイツ、本気で自分が正しいと信じてる。
「そうですか。でしたらその無駄に一途な情熱を別の方に向けて下さい」
「――っ」
なるだけやんわりと皮肉を言って必殺スマイル。
それだけで川口先輩は口許を引きつらせて形相を変えた。何とも醜く、無様に縋るような情けなく歪んだ顔。
「七草！　ちゃんと俺の話を聞いてくれ！」
「十分聞きましたよ。実につまらない、でき過ぎた、一方的に私が泥を被ってるツンデレヒロインで、先輩が純朴主人公の甘ったる過ぎる――ただの妄想なら」
びしり、と。音を立てて、川口先輩の表情は歪んだそのままに、今度こそ固まってしまった。
「そんな――だって……」
「先輩」
私は、この時、いったいどんな顔をしていたのだろうか。
「好きだ好きだ、って散々言ってくれてますけど。いったい私のどこが好きだというんですか？」
少なくとも、頭の中だけはこのムカつく先輩への怒りでいっぱいだ。昨日から本当に、私につきまとうだけつきまってくれているのだから、迷惑以外の何でもない。
「それは――」
「顔ですか？　体ですか？　それとも、こんな性悪の中身ですか？」
川口先輩は、黙って俯いてしまった。

元から答えられるわけなんてないとは思っていたけど。だって、
「アンタが惚れているのは私じゃなくて、アンタの妄想の中で勝手に作った私のイメージだろ」
川口先輩から、答えはなかった。
完全に押し黙って、私から顔を逸して、
「……そうかもしれない、な……」
認めた。
嘘でも何か適当なことならべて引き止めるくらいするかと思ったけど、どうやら今の彼にはそんな余裕もないのかもしれない。
「でも、そんなことはこれから直す。――だから、」
訂正。コイツ、けっこう余裕あるわ。あと案外打たれ強い。
「俺の側にいてくれ」
しかも、無駄にポジティブ。臭いセリフを平然と吐くし。心なしか目なんかキラキラ輝いてる気がする。
ここまでされると、怒るを通り越して呆れると言うか何と言うか……。
とにかく。今は一刻も早くこの場を立ち去りたい一心に次の言葉を考えていると、――川口先輩が強引に私を抱き寄せやがって下さいまして、一言。
「好きだ」
ウザっ。
何コイツ？　何を馬鹿みたいに一人で熱血ドラマ演じて私を巻込んでくれちゃってんの？
「離してください」
「嫌だ」
いや。離せよ。
何が楽しくて私は昨日フったばかりの男に抱き締められてなきゃいけないわけ。暑苦しい。汗臭い。むさくるしい。うるさい。締められてる体が節々痛い。つーかウザい。
「……離せよ」

「離さない、絶対に」
私の冷たい声に川口先輩は今度は揺るがず、余計に強く私を抱き締める腕に力が込められた。
ヤバい。さすがにこのままだと苦しいし。あくまでか弱い女の子である私はこのままったく好きでもない暑苦しい男の腕の中で眠ることになるかもしれない。それだけは絶対に嫌だ。
「ほんとに、離してよ」
「お前が、俺を好きだ、と言うまで、離さない」
いや。死ねよ。
「絶対に、だ」
どんどん私を締める力が強くなってきて骨が軋む。
あー、もー……。
「――っ」
「離せ、って言ってんだよ」
何度言っても聞いてくれないこの先輩の股の辺りを、思いっきり膝で蹴り上げてやった。一回。二回。三回。四回。五回……。途中から数えるのがめんどくさくなったけど、それでもまだ蹴り続けた。
「な、七草！　止め――」
「だったら――」
最後に、腕の力が緩んで少し自由になった身体の重心を落として、下半身の筋肉と骨のバネを生かして――渾身の膝蹴り！
「――いい加減、離せよ」
できるだけ低く冷たい声を作って、膝から崩れていく川口先輩の耳元に、周りに聞こえないよう囁いてあげた。いや、でも、たぶん聞いちゃいないだろうけどね。
だって、
「あと、何もかけずにそんなとこで寝ると、いくら最近暖かくなってきたとはいえ風邪ひきますよ」
白目をむいて泡を吹く先輩に、私からの優しい一言。
最後に、廊下のど真ん中で寝てしまった川口先輩を廊下の隅へと

蹴り転がして、たまたま通りかかった人に「後はよろしく」と肩を叩いてやって――。

「さて、と。兄さんのとこへと急がなくちゃ」

再び、私は急ぐのでした。

Don't disturb！（後書き）

学食のおばちゃんが変わってからラーメンのチャーシューが前よりも薄くなった気がする婀凛栖です。おはよう？　こんにちは？　こんばんは？　いや。どれでもいいのですが。

今回のお話は大学の無機化学実験のガイダンス中に教授殿がなぜかエンジニアとしての云々について暑苦しく語っておられる最中に書いていたものです。本当に、何でいきなりそんな云々な話になってしまったのでしょうか。退屈でしょうがな――げふん、げふん。素晴らしいお話に耳が痛くなってしまいましたよ。ええ。本当に。

さて、今回、なんと川口先輩再登場させちゃいましたけど――ぶっちゃけ川口先輩はいらない気がします！

だって、出てきても何かこんな扱いばっかりだし！　あと書いて本当に自己嫌悪したくなるくらいにムサいし！　あとそろそろ兄さんをまともに出したいから、もう川口先輩はいらないかと。と思う、今日この頃。

ほんと、彼、どうしましょう……？

……さて、なんか無駄な内容を書き過ぎてしまって字数がなくなってきてしまったため、今日はここまで。次回では本当にお兄さんを出したいなぁと思いつつ、また次回へ続きます。

では、また次回も出ることを祈りつつ、――シーユーアゲインっ！

His girlfriends（上）

喩えるのならば――白。

私の兄さんは、そんな表現がものすごく似合ってしまう人だ。

少しのびた色素の薄い細い髪。血管が浮き出て見えそうなくらいに、病的に白い肌。綺麗に整った、色の薄い顔立ち。本人の性格が見てとれるような、アクセサリーなんかで一切飾らない、真っ白なワイシャツとジーンズを穿いただけの細い体躯。

七草春霞（ななくさはるか）。

私の兄さんは、そんなまるで女の子のような容姿に合わせたかのように、女の子のような可愛らしい名前をした人だった。

その兄さんは、私、七草秋穂よりも一つ上の同じ学校の先輩であり、現在、校門にて待っているはずだ。私と買い物をするために、だ。……だというのに――。

「あ。秋穂ちゃん。やっと来てくれた」

「……兄さん」

「どうしたの？　何か疲れたような顔しちゃって？」

「あの、兄さん――そちら様は、誰？」

私を待ってくれていたはずの兄さんと、隣り合うようにその場にいて、何か私をじろじろと見てくる、私の知らない女。

「ん？　ああ。この人は――」

その女は、たぶん私に紹介しようとしてくれていた兄さんの口を、指を添えて唐突に塞いで、

「んー。この可愛い娘は君の彼女君？　そんなのいるなんて聞いて

ないんだけどなぁ。あたしは」
　無駄に色っぽい、艶しい声でそんなこと言った。いや。アンタ、私が『兄さん』って言ってんだから、妹だって普通にわかるだろうに。あと『先生』なんだ。随分と若いね。二十代の前半？　つーか、近い。すごく近いから。兄さんに目茶苦茶近いから。羨ましいから離れろよ。
「あー、秋穂ちゃん、こちら教育実習生の望月佳代（もちづきかよ）先生。先生、この娘は僕の妹の秋穂ちゃんです」
「へー、教育実習生……」
「へー、妹さん……」
　……何だろう。なんか嫌に――
「……あんまり春君に似てないねー」
　――ムカつく。
　つーか、何様だろうか。あって言うなり私が兄さんに似てないと？　何でそんなことを赤の他人に言われなければならないのだろう。あとさっきコイツは兄さんのことを『春君』なんて呼びやがりましたか？　なんて羨ま――いえ、なんて、なれなれしい！　名前で呼ぶなんて！　『春君』だなんて！　あんな甘ったるい声で！　兄さんにあんなに近付いて……！
「まあいいやー。春君行こー。あたし達の家具を買いにー！」
「先生の、でしょ」
「ううーん。じゃあ。そのうちあたし達のになる、で！　あと春君、あたしのことは佳代ちゃんって呼んでって言ってんじゃんっ」
　そんな仮にも聖職者を目指すものかとしてどうかと思われることを言って、望月さんは、
「じゃっ、張り切って行こっか！」
　兄さんの手を抱き締めて行ってしまった。いや。おい――。
「……あのー、私はおいてきぼりですかー？」
　何これ？　放置プレイってやつかしら？
　それともわざわざ私に見せつけてくれちゃってるわけ？

「――あ。そうだ、そうだ。今日は春君の妹さんがいるんだったね。すっかり忘れてたよ」
と、振り返る望月さん。
何とすっかり忘れられていたようです。
「今日は春君との初デートだからってつい浮かれちゃって」
どうやら初デートだそうです。――って、
「……デート……？」
「そう！　デート！」
兄さんとこちらさんが、と訊く前に、いきなり抱き付かれた。もうね、密着状態。そして私の胸に当たる、二つのバレーボール大の柔らかい膨らみ。おおうっ、ダイナミック……！　――って、それよりもデートって！？
「違いますから。貴女が家具やら日用品を買いたいけどこの町のことは来たばかりでよくわからないから案内して、って人の了解もなしに連れ出したのは誰ですか」
「ちぇー。少しはノッてくれてもいいじゃん！　春君のケチ！」
あ。何か違うらしい。
いや。でも、だったら何で私はこの場に呼ばれてしまったのだろうか？
ぶっちゃけ私いらなくない？
「それじゃ、行きましょうか」
「はーい。新しい食器棚とベッドと布団とお皿と――」
「はいはい。別に口に出して確認なんてしなくていいですから」
「あのー、兄さん……？」
話を聞く限り、もしかして、本当に私いらなくない？
「私、いらなくないですか？」
「ん？　すっごく必要だよ？」
――嬉しっ！
「じゃあ。あとよろしくね。ちゃんと先生と仲良くしないとダメだよ？」

……あれ……？

Ｈｉｓ　ｇｉｒｌｆｒｉｅｎｄｓ　（中）（前書き）

つい最近まで、この小説の存在を忘れてました……。

His girlfriends（中）

どうしてこんなことになってしまったのだろうか――。

「これも可愛い……」

「いや、あの……」

「ちょっと待って。うーん……これも捨てがたいわねー」

さっきからカーテン越しにガンガンと服が流れ込んでくる。しかも、どれも露出の多いものだったり、ふりふりのレースだらけのものだったり、挙げ句はスーツみたいなものまで、私の好きくない部類のばかり。

たしか、家具やら何やらを買う予定なのではなかったのか、と思うのだが。

本当にどうしてこんなことになってしまったというのか――。

◆◆◆◆

「ほー。妹さんは美人さんなのねー」

なんて、何の衒いもなしに言われて、耳の端で聞きつつ、私はどう答えればいいのかなんて少し考えてから、「はあ。どうも……」なんて当たり障りのない生返事を返す。
私はこの無駄に色っぽい先生とやらと並んで歩きながら、この人の家具なんかを買いに行くのに付き合っているのだというのに、なぜか骨董市なんかに来ていた。
しかも、
「あ。この壺よくないですか？」
「えー。少し地味じゃないかなー？」
「そうですか？　あ。この皿なんかも」
実は、けっこう満喫してる。
ものの鑑定なんてできるわけもないし、価値なんかはまるでわからないのだけど、こういうものは何だか見ていて楽しい。
骨董市なんて色気も何もない場所に夢中になっている私は、この先生とやらが横から何か言っているのを、「はあ」とか「どうも」とか「そうですか」なんて短い言葉で買えしながら、目についたものを手にとっては睨み合ってみる。
「楽しそうね」
「楽しいですよ」
「ふーん。あたしはこういうのよくわからないけど、やっぱりすごいの？　やっぱり高かったりするわけ？」
「あ。私もそれはよくわからないんです」
「？　そうなの？」
「ええ。なんか、こういうのって、そういう値段的な価値よりも見て楽しければいいかなー、って」
「ふーん。変なの」
変なのって言われた。
いいじゃんか。楽しいんだもん。目で見たり触って感じるんじゃないんだよ。フィーリングハートすんだよ。骨董品は。
「あ。ごめんっ。気悪くしちゃったかしら？」

「あ？　ああ。いえ、別に先生が悪くなんかは……」
なんて答えたもんかと少し考えていた私が怒ったように見えたのか、彼女は手を合わせて申し訳なさそうにそう言った。
私はそれを誤解だと言ったのだが、先生はペコペコと頭を下げて聞こうとしない。というか、聞いていない。
「いや、本当に、そういうのいいですから」
「でも……」
「あー……、じゃあ、ほら。そろそろ私も飽きてきましたし。そろそろちゃんと家具を探しに行きましょう。ねっ」
何が、ほら、なのか。
実はまだ骨董品を見ていたかったのだけど、
けっきょく、周りからの奇異の視線が怖くて、私は強引に適当な理由をつけて、先生の手を引っ張るようにして逃げるようにその場をあとにした。

「何か、あたしの都合で急かしちゃったみたいで本当にごめんね」
「いえ。いいですよ、これくらい」
ふむ。どうやら、第一印象や女の感とかでの判断していたよりも、この人はだいぶ良い人だと思う。
兄さん絡みだからといって、目くじらを立てていた自分が恥ずかしいくらいだ。また香織に茶化されても呆れられてもけなされてもしょうがない。けなされたら殴るけど。
「あー。何かこの冷蔵庫かわいくない？」
「……そうですか？」
「？　かわいくないかな？」
つーか冷蔵庫にかわいいとかかわいくないとかあるの？　はじめて知った。別に興味もないけど。
「といいますか、部屋の間取りとかでこういうのって決めるもんな

んじゃないんですか？」
「そういうものなの？　うーん、まあ、いいや。そういうのよくわからないし。あたしはこれ気に入ったし」
と、先生は、御機嫌そうににぱにぱと笑いながら、店員を呼んで、なんとその場で購入してしまった。お支払いは現金だなんてリッチに。
「うんっ。いいもの買ったわ」
「……そうですか」

つーか、私いらなくない？　なんかさ、いらなくない？　私？

私がやったことなんて、こんなどこにでもあるようなお店に連れて来て、後は先生がてきとーに選んで買ってるだけ。
いらなくない、私？　つーか、むしろいらなくない……？
「秋穂ちゃん」
「はい？」
「ありがと」
「……はあ」
私は特に何かやったわけではないのだけども、何にも答えないわけにもいかず、私は、「どういたしまして」と返して、愛想笑いを浮かべた。
あと、なんか今、秋穂ちゃんって言われた。いや、それくらいは別にいいけど。

「今日は助かったわ」
「はあ」
「だからさ、」
「？」
「お礼くらいはさせてね？」

――と、艶っぽく微笑まれて、私は何となく断るに断れなかったのだった。

◆　◆　◆　◆

「まさか、お礼とやらがこんなのだなんて……」
「あ。今の、目つぶってたからもう一枚っ」
まさか、試着室に連れ込まれて、「何か似合いそうな服を買ってあげる」なんて言われるとは思わなかった。
しかも、こんなにたくさんの服を押しつけられるなんて。着せられるなんて。さっきからケータイのカメラでパシャパシャ撮られていることも含めて。
持って来られた手前、一回も着ることもなく返すのは何だか悪い気がして着て見せてみたらこんなことに。
これだったら着ない方がよかったと後悔してももう遅かった。なぜなら、
「あの、いい加減に私の服返してもらえませんか？」
「んー？　じゃ、次で最後」
と、こんなやり取りがさっきから何回か十何回か。
気がついたらいつの間にか先生が私の服を持っていて、私はさっきから持って来られた服を着てはこんなことを訊いて、こんな感じに新しい服を渡されてはを繰り返している。
「はい。これで最後だから」
「……次こそ最後ですよ」

我ながら律義というかなんというか……。
私は、渡された服を手にとり、
「……水着じゃないですか」
「水着だが？」
唖然とした。
この紐に小さな布が申し訳程度についたビキニにも。
何かおかしいだろうか、なんて本気で訊いてくるこの先生にも。
「いや。何で水着？　つーか今さらだけど何か色々とおかしくない……？」
「ん？　ダメだったかしら？　あたしが秋穂ちゃんがこれを見たかったからだけど？」
……さらりととんでもないこと言いやがった。
「嫌だよ！　何だよコレ！？　ほとんど紐じゃんか！　見えるじゃんか！！」
「大丈夫よ。見えないから水着ってカテゴリーなんだから。あと見えた方があたしとしては嬉しいし」
何か言った！　今、さらりとまた何か言った！
「もう……嫌だあ！」
試着室からまだ買ってもないスーツのまま飛び出して、先生の手から服をひったくって試着室へと戻る。そのまま邪魔をされないうちに急いで服を着替えて、試着室のカーテンを開け放って、
「アンタ何なんだよ！？」
と、私は言い放ってビシッと指を指してポーズを決めた。
「あら、何でそんなことを訊くのかしら？」
何でって？
だって気になるじゃん！
だって何かさっきからおかしいんだもん、この人！
「えっ？　なに？　何かおかしかった？」
「おかしいだろ！？　むしろどこがおかしくなかったんだよ！？
つーか何なんだよアンタ本当にっ！！」

兄さんの先生という手前、猫を意地で被っていたが、もう無理。
暑苦しくて脱ぎ捨てて洗濯して、干してしわをアイロンで伸ばして、ブティック畳みでタンスにしまってやる。
「あー……何かごめんね。つい楽しくなっちゃってね。あたしさー――」

――バイだからさー。

……。

……。

……。

「……え？」

「あれ？　言ってなかったかしら？」

言ってません。聞いてません。つーか、何かまたさらりと言われた……。

つーか、つーか――

「ちなみに秋穂ちゃんも春君もあたしの好みよ」

「聞いてねえよ！」

――来るんじゃなかった……っ！

Ｈｉｓ　ｇｉｒｌｆｒｉｅｎｄｓ　（中）（後書き）

おひさしぶりです、なんて言っても、はたして私なんぞのことを覚えていて下さっている方がいますでしょうか（汗

久々ですからねー。二か月ぶり以上。殺人鬼とペーパーナイフの方にいたってはもう半年くらい……

もし、私なんぞの作品を待っていて下さった方がいたのなら、申し訳っ。

それから、ありがとうを。

Ｈｉｓ　ｇｉｒｌｆｒｉｅｎｄｓ　（下）（前書き）

そういえばいつの間にか夏休みに入りました。

「ただいま……」
ばたんきゅー。
私は、身体中というか、主に心の奥底から絡み付く疲労感に身を任せて帰るなりリビングのソファに身を投げ出した。
「あの……糞女……」
自分でもビックリするくらいにドスの効いた声を捻り出して、八つ当たりに手元にあった枕をぼふぼふと殴る。
腸が怒りで煮えくり返りまくってしょうがない。
人が下手に出てれば、何だアイツ！　つーか何だよアイツ！
アイツのあの満足そうな顔を思い出して、やり場のない怒りをぼふぼふぼふぼふと愛用の低反発枕へと拳でぶつける。
ぼふぼ、と。
「……さっきから何やってるの？」
「あ」
兄さんが訊いてくるまで。
どうやら兄さんがさっきからの私の奇行を見ていたらしいことに、私は「えーと、ダイエット……？」と、自分でもこれはないわと嘆くような言い訳をしながら、またぼふぼふと枕を殴った。今度はさっきよりも少し優しくお淑やかに。
「へー。そんなダイエットがあるんだ」
兄さんは、私のどう聞いても言い訳にしか聞こえない言い訳に、

「なるほどー。秋穂ちゃんは物知りなんだねー」と感心したように頷いた。そんな素直な兄さんが私は大好きです。
私が「そうなんですよ。最近少し体重が増えちゃって」と、あまり乙女としては口にはしたくない理由を言った。兄さんは、「秋穂ちゃんは全然太ってないからいいじゃん。むしろ細いんだから少しくらい太りなよ」と、枕元に腰掛けて、私の頭を優しく撫でながらそう言ってくれた。
「いくら兄さんがそう言ってくれても、太るのは嫌です」
「そうかなー？　女の子はふっくらしてるくらいが可愛いと思うけど」
「それでも女の子としては細い方がいいんですよ」
「秋穂ちゃんも？」
「当然ですよ。女の子ですから」
「女の子、ね。男の子な僕にはよくわからないけど、そういうもんなのかね？　女の子って生き物は」
「そういうもんですよ、女の子は」
「そういうもんなんだ、女の子って」
また感心したように頷きながら、兄さんは、また私を撫でた。
嬉しいですよーっ、と叫び出したい衝動を抑えながら、兄さんを見る。
兄さんは、にこにこと笑う顔が手を伸ばせば簡単に届いて掴めてしまいそうなくらいに近くにある。
「あ。そういえば、秋穂ちゃん」
「？　何ですか？」
つい見惚れていた顔が何かを思い出したように、
「ただいまのちゅーがまだじゃなかった？」
と。言った。
私は、急に跳ね上がった心臓の鼓動を無理矢理に無視して、「そ、そそそそういえばまだでしたね」なんて白々しく言って、少しだけ深呼吸をして、あの顔が逃げてしまわないように、できる限り優し

く手を添えて、
「――では、ただいま」
「はい。おかえり」
そして、私達は、互いの唇を――……

◆　◆　◆　◆

「とっと起きろー」
「ろー」
びしっ。
「のぎゃっ」
ごろごろ。
びったんっ。
……？
あれ？　キスは？　ただいまのちゅーは？
周りを見ても、兄さんはどこにもいなくて、妙に低い視点はどうやら教室の床から数センチの高さにあるようで。
つーか、まさか、さっきのは夢で……？
「起きたか？」
と、思いっきり残念がる私の目の前に足が現われる。
「……あにすんのよ？」
私は少し視線を上げて、その足を掴みつつ、そいつに問う。
「起こしてやったんだよ」
「次、移動教室」
なぜだか床に横たわった私は、とりあえず目の前にいる香緒里と、

茶髪のポニーテールが目を魅く可愛らしい女の子で私の心の第二位の天使、一井（いちい）　遊良（ゆうり）の二人をぼんやりと眺めつつ、「とりあえず、後で香緒里はしばく」と言っておいた。香緒里は、「何であたしだけ？　遊良（ゆうり）は？　依怙贔屓か、おい？」とかぶつくさと文句を吐いていた。

香緒里の文句を無視して、掴んだ足を思いっきり捻りあげて起き上がる。私よりも随分と低い遊良の目を見下ろすように睨むと、遊良はびくりと蛇に睨まれたリスみたいに、小さな身体を強張らせた。ちょうどあの可愛らしいポニーテールが尻尾みたい。うん。それでこそ遊良。超可愛くて私はそれだけで満足なのです。

「あの、その、ごめんね。秋穂ちゃん……。でも、次は移動教室だから……」

本当に申し訳なさそうにそう言う遊良に、私は努めて優しく微笑んで、

「うん。ありがと」

と、言って、遊良の頭を撫でた。

横から香緒里が、「依怙贔屓か。依怙贔屓なんだな、おい？　つーか何だよ？　あたしとこの遊良との扱いの差はよ」って何かぶつくさ言いまくってるが無視して。

「香緒里は後でケツの穴から低温殺菌牛乳流し込んでやるわよ」

と、脅して香緒里の頭をわし掴んだ。

「おまっ、仮にも女の子だろうが」

だから何ってゆー。

人がせっかく良い夢見ていたというのにこんな起こし方をしやがって、何が楽しくて私は床とあんなに激しいキスを交わさなきゃならないんだ。

むしろこんなもんじゃすまさないしー。

「んだよ。夢くらいでそんなに怒ることねぇだろうが」

「想い人との甘い一時の夢よ？　れろちゅーかましてベッドインする甘ーい夢よ？　それをアンタは……怒るわよ、ふつーの乙女は」

「いや。お前さんはふつーの乙女じゃないし。あと何？　お前、欲求不満なんか？」
「どこの口が欲求不満ときますか。そんな単語はできれば私にじゃなくて万年発情魔なアイツとか糞母上とかアンタの糞兄貴とかに言って欲しいくらいだわ」
「はっ。実の兄貴に欲情してるお前さんよりはマシだね。いや、うちの兄貴は最悪だけど」
「つーか、アレさ。首輪くらい付けときなさいよ。発情期の犬かってくらいに変態じゃん。逢う度に襲われるんだけど」
「それを毎回殴って気絶させてるんだからいいじゃんか。アンタは」
「よくないわよ。つーか――」
「――授業」
不意に、遊良が、地味にヒートアップしてた私と香緒里の間を縫うように一言そう言うと同時に。

きーんこんかーんこーんっ。

「「あ」」
「始まっちゃったよ……」
授業開始の鐘の音にもかき消されない、遊良の呆れしか感じられないため息を聞いた。

「それでは授業に遅れてきた七草さんと一井さんは罰として先生のためにウィスパーボイスで心を込めてラブソングを熱唱して下さい」
「え？　えっ？　嫌ですよ、そんなの」
「遊良、しなくていいわよ……」
「いや。つーかあたしはおとがめなしでＯＫ？」
傲慢に破天荒な先生のセリフに、私達は三者三様の反応を見せる。

ちなみに遊良のがものすごく絵になってて超可愛いかった。
いや、まあ。今はそんなことよりも……。
「何でアンタがここにいるわけ……？」
「それはわたしがここの教育実習生で音楽の授業を任されているからよ」
と、豊満で艶っぽい胸を張る、望月　佳代。こと変態。
「まあ。秋穂ちゃんはツンデレだからしょうがないとして。……一井さん」
「は、はいっ」
「アナタの恥じらい感は見ててたまらないので今すぐに――」
「――おおっと手が滑ったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
たまたま手に持っていた分厚い音譜ばかりの音楽の教科書が、たまたま手が滑って先生の顔に叩き込まれてめり込む。
「すいません、先生。ちょっと手が滑っちゃって」
「い、いや。今のは滑ったとか滑んなかっとかよりも――」
「ああっとこんなところに可愛い可愛い遊良に毒牙を向ける害虫が！！」
全力で害虫（ヘンタイ・望月　佳代）に踵を叩き込む。
害虫が何か声のない断末魔を上げているけど、この際そんなことは気にしないでこの間の報復に蹴って蹴って蹴りまくる。
「あ、秋穂、ちゃん……」
「あによ」
「個人的には、下着は白より――うごぅ！？」
最後に、一撃。
先生の両目が破裂しますようにー、と願いを込めて思いっきり踏み付ける。
鼻血を流しながら、ピクピクと痙攣している先生を一瞥し、遊良を先生から引き離す。
「遊良。大丈夫だった？」
「あ。うん。わたしは大丈夫。大丈夫だけど……。あの、先生は…

…」
遊良はなんとなく不安そうに横たわったまま起きない先生をちらりと見ていた。優しいなー、遊良はー、もーっ。
「ああ。アレなら大丈夫よ。たぶん」
「でも……」
私は遊良を抱き締めて愛でたい衝動を必死に抑えて。
「大丈夫。これからちゃんと保健室に運んでくるから。ねっ」
私は努めて優しく微笑んだ。
遊良が少しだけ引きつった怖いものでも見るような笑顔を見せたけど、今の私は遊良を毒牙から守れたことと、昨日のうっぷんを晴らせたことに満足しながら、未だに眠る先生を保健室へと引き摺った。

「秋穂ちゃん？　何で授業中に先生引きずってるの？」
突然聞こえたその声に身体がほとんど条件反射的な速度で振り返る。
「……兄さんこそ、新さんを背負ってるじゃないですか」
そこにいたのは、見るからに血色の悪そうな顔をした細い女性を背負った、私の兄さん。
兄さんは「ああ。また貧血で倒れた」なんて微苦笑を漏らした。
「新は昔から身体弱いからね。何かもう、その度にこんな感じ」
そう言う兄さんの顔は、別に不快だというものじゃなかった。
兄さんに背負われた女性、新城（あらき）　新（あらた）は私達兄妹の昔からの幼馴染みだ。
彼女は昔から人並み以上に身体が弱く、昔から何かことあるごとに倒れていた。たぶん今日もまた、だろう。
病弱だからというのが理由だからかは知らないが、兄さんはそん

な彼女をいつも気にかけていて、今日までその関係を続けている。
傍目から見ても嫉妬するような、男女で友人以上の関係を。
「まあ。見ての通り僕は新を運びに保健室に行くんだけど、秋穂ちゃんも？」
「……いえ」
何でここで『うん』と言えなかったのか、自分でもわからない。
ただなんとなく兄さんから離れたい一心に「私は先生を花子さんが出ると噂の男子トイレにぶち込まなきゃいけないので」とそんな意味のわからないことを早口に言って、私は先生を引きずって兄さん達を尻目に歩き出す。
なんとなく、あそこにいたくなかったのだ。

「……ジェラシー？」
「――――」

くそっ。起きてたのかこの変態は。
先生は私の手を払い、よいしょと起き上がり、
「いやいや。恋する乙女は繊細なものね」
なんて、にんまりと笑った。
何だかその顔が酷くムカつく。
教師でなければぶんなぐってやるのに。

「んで、あの二人はどこまでいってるわけぇ？」

先生が訊く。
コイツ、やっぱり嫌なやつだ。
私の心をわかっているうえで訊いてやがる。
そしてそれを私に言わせるつもりか。
ムカつく。
ウザい。

本当に嫌なやつ。
「ねーねぇー。どうなのよー？」
「……別に」
どうもこうもない。
兄さんと新さんの関係は友人以上の付き合い。
つまり、
「兄さんと新さんは――ただの彼氏彼女の間柄ですよ」

Ｈｉｓ　ｇｉｒｌｆｒｉｅｎｄｓ　（下）（後書き）

最近は『冷やし中華始めました』を見てもときめかなくなりました（特に意味はない）。

本当に最近までまたこの小説の存在を忘れていた子です。本当におひさしぶりです。

さてさて、このブラコン妹物語は今回のお話でやっと色々と書けましたよ。

実は先生はーとか、妹にも友達とかいたんだねーとか、兄さん彼女いたんかいとか。

相変わらず馬鹿みたいに馬鹿なものを書いた私でした。本当に（笑）

それでは皆さんまた思い出した頃にでも。

ついでに次回はたぶん『Ｂｒｏｔｈｅｒ'ｓ　ｗａｌｌ』かもしれません。

「失恋した……」
さっきからそればかり。
痴呆老人の戯言みたいに繰り返されるその言葉にもいい加減に変化が欲しい。
「先生は失礼しました……」
「はいはい。わかりましたよ」
現在、私は学食にてテーブルにうなだれながらしくしくぶつぶつと同じことばかりを呟き続けている先生と対面しながら学食の甘ったるいカレーを食べている。
「つーか、先生、アンタね、兄さんに彼女いるってわかっててあんなこと訊いたんじゃなかったわけ？」
「知らなかったわよ……。だって春君ってばいかにも純情チェリーボーイって顔してるし。いや、可愛いけど。とっても可愛いんだけどさ……」
聞いてて馬鹿なんじゃないかという感想しか沸いてこない。
兄さんは別に彼女がいることを隠してなんかいないし隠すつもりもないだろうし、むしろあの二人が付き合っているというのは有名なことだ。だというのに、この人はあれだけ兄さんにベタベタとくっついてたくせにまったくその存在に気付かなかったというのか――。
「先生、アンタ、もしかして――恋は盲目ってやつの体現なわけ？」
「え？　皆そうでしょ？」
皆そうじゃねぇよ。それが許されるのは純情な乙女の硝子のハー

トだけだよ。
「ああ、もう、秋穂ちゃんでいいや。結婚しよ」
「嫌」
「少し大きめの庭付き一戸建てに子供が男の子と女の子の一人づつとの四人。あたしが教師続けて家事全般は秋穂ちゃんがやってくれて、あたしは毎日お仕事でヘトヘトになりながら帰って来て、そんなあたしに秋穂ちゃんが『お帰りなさい、アナタ。ご飯に私を食べる？　お風呂に入ってから？　それとも今からここで？』なんて訊いてそのまま――て、嫌！？　何でよ！？」
「何でじゃないわよ。何で私がアンタなんかと結婚しなきゃいけないのよ。あと日本じゃ同性の結婚できないし。同性じゃ子供もできない。それから私を食べていいのは兄さんだけよ」
　ぎゃーぎゃーわーわー、食事中だってのに何だって私はこんなやつに付き合わされなきゃならないというんだ。いつもなら香織や遊良と一緒にご飯を食べてのんびりと昼休みを過ごすというのに……。
「何が楽しくて私は先生とこんな馬鹿話しながらまっずいカレーを食べなきゃいけないってのよ……」
　ついつい本人が目の前にいるのも忘れて、ため息が漏れる。
　まったく、今日はもうまたいつにも増して胸の奥からこうむしゃくしゃしてきてイライラとムカムカと何か落ち着かないってのに。
　だというのに、この自分勝手な先生は昼休みに入るなり、「ちょっと付き合って」と嫌がる私を無理矢理引きずって食堂に連れてって兄さんと新さんのことについて訊いて、私は私の知ってる限りのことを正直に答えたところ――この有様。
「ほんとに、何で私が……」
　ふつふつと沸き上がってくる苛立ちを甘ったるいカレールーと薄いお茶で流し込む。もう嫌だ。今日は厄日だ。もうさっさとこのカレーを食べて退散しよう。これ以上こんなのに付き合ってられるかってんだ。
「聞いて！？　ねえ聞いてよ！　聞かないなら聞かないでいいけど

さ！　叫ぶよ！　秋穂ちゃんのいけず！　ブラコン！」
「うっさいヘンタイ！」
騒ぎ立てる先生を一喝して、私はカレールーで汚れた皿を先生の顔に叩き付けて黙らせた。

◆　◆　◆　◆

「またお前さんも変なのに好かれたもんだね……」
疲れた、という顔を露骨に見せてやると、香織里はそんな同情めいた言葉を投げてくれた。
「ほんとにアンタ、何か変なフェロモンでも出してんじゃないでしょうね？」
「……冗談」
自分でもそういうヘンタイばかりを寄せていると自覚があるだけに冗談に聞こえない。そんなわけがないけど。
そんなことを考えてげんなりうなだれる私をじぃーと眺めながら、遊良がぽつりと呟く。
「……類は友を呼ぶ？」
……うわぁ……なんか今すごくその言葉がしっくりきた……。
香織里なんか必死に笑いを堪えてぷるぷる震えてる。
ってゆうか、痛い。自分がヘンタイ（重度のブラコン）という自覚があるだけに今の遊良の言葉がとても心に痛い……。
「あ。あ……別に秋穂ちゃんがヘンタイってわけじゃなくてね……

？　ええっと……」　そこで言葉を詰まらせて視線を泳がせないで下さい。
「あ、あの……ごめんね……」
「いいよ、いいわよ……。どうせ私はヘンタイさんよ……」
世間一般的にも風当たりはよろしくないしね。ブラコンって。おまけに『ｌｉｋｅ』じゃなくて『ｌｏｖｅ』だから尚のことね。
「ふーん。お前さんでもそこまではちゃんと自覚があるわけか」
うなだれたまま愚痴る私に、香織里は意外だと言った。
コイツは本当に私のことを何だと思っているんだろう。これでも私はその辺については弁えているつもりだ。
「……でも、秋穂ちゃんはそれでも愛しちゃってるんだね」
「……そうよ」
ええ。そうよ。
それが分かっていても、私は兄さんを愛してますとも。

喩え、彼に彼女がいても。
喩え、それがいけないと分かっていても。

「私は兄さんを愛しているのよ」

喩え、彼が私の兄さんでも――。

Brother's wall（後書き）

どうも。毎度お馴染みの作者でございます。
これを書いてる頃の私はまだあと一ヶ月ある夏休みを寝ながら過ごして書いたものです。何で大学ってこんなに休みが長いんでしょうね？
まあ。それはさておき。
今回のお話でようやっとこの作品のプロローグっぽいのは終わり。次回から普通にコメディーになります。たぶん。

あと今さらなんですが、これ普通のラブコメなのかと訊かれたらけっこうどうなのよ？　ってなります。
だって、妹もののラブコメなのに秋穂が何か妹っぽくないです。何か変なのになりました。いえーい。
あと先生、名前忘れました。いえー（殴）

あと。なんといいますか、こんだけ書いておきながら言うのも何なんですが、ラブコメの主人公って大抵男の子が主人公じゃないですか。そのせいか、たまに秋穂ちゃんは妹じゃなくて弟とかのがよかったかも、なんて思います。でも、何故か妹にしたことを後悔していません。不思議ですね。ぶっちゃけどうでもいいことなんですけどね。皆さんはどう思います？

DOUSHITAMONKA？（上）（前書き）

御意見感想お待ちしております。

DOUSHITAMONKA？（上）

「秋穂ちゃん、起きてる？」
「……はい」
「あ。ごめん。寝てた？」
「……いいえ？　起きてますか？」
「……」
「起きてます？」
「……顔洗ってちゃんと目を覚ましてきなよ」
「……はい」
「僕はちょっと新と……」
「むがー……っ」
「？　秋穂ちゃん？」

◆
◆
◆
◆

恥ずかしいところを見せてしまった、と思う。たぶん。

今日は土曜日。
現在はお昼を回って午後二時。
ちなみに起きた時間も二時。
つまりは今の今までずっと寝ていたわけで、今さっき兄さんに起こされたわけだ。ちくしょう。土曜朝九時のアニメも見れなかったし、いいとも創刊号もアッコにお任せも見れなかった。
なのに兄さんには私のだらしない一面を見せてしまった。
「……」
鬱だ。不覚だ。自己嫌悪だ。
思い出しただけでも赤面通り越して果てしない空なんかよりも真っ青になるわ。むがーって何よ、むがーって……。
寝癖だらけでぼさぼさな頭を抱えて自己嫌悪にこんな寝ぼける低血圧の頭なんて壊れてしまえとテーブルに頭を叩き付ける。痛い。痛い。やっぱり止めよ。痛いのは嫌だもの。ただでさえ悪い頭が本当に頭が壊れたら困るもの。
今からメールでも電話でも何でもいいから兄さんにつないで謝らなければとは思っているのだけれど、つながんない。どうやらケータイの電源を切っているらしい。
八つ当たりにケータイを投げ捨てる。べぎんっ。しかも壁に当たって鈍い音と一緒に壊れたし。ああもうお前は悪くないのにこれで何度目だ。次はこれくらいの衝撃で壊れないようにＧ－ＳＨＯＣＫのケータイにしよう。
ケータイも壊れたし、もう一日の半分は終わってしまってるし、何より兄さんはいないしもう今日はダメだ。
よし寝よう。今日は今日という一日を寝て過ごそう。
そんな怠惰な一日の予定を決定させて、私は愛用のベッドに潜り込んでもう一度寝る前に、冬眠前のクマのように何かを食べようと冷蔵庫を漁りに台所へふらふらと入り込んで、何かいた。
後ろ姿がメイドっぽい何かがいた。
まだ寝ぼけてんのかしら、私。

脳に粘つく眠気を覚まそうと目をぐしぐしと擦っていると、その台所にいたメイドっぽいのは私に気付いたらしく、私の方へと振り返って、目鼻立ちのすっきりと通る愛くるしい顔をにっこりとさせてこう言った。
「あ。秋穂様おはようございます」
「おはようございます……秋穂、様？」
もうおはようって時間でもないけど。
何となくつられて私も言ってしまう。いやいや秋穂様って何だよ、秋穂様って。自分に様付けって何だよ。
馴れない呼称に思いっきり戸惑う私ににっこりと微笑むメイド。
うん。どっからどう見てもメイドさん。ただし着ているメイド服がどこかイメクラっぽくて胸がすごくデカくて金髪ツインテールってのがものすごい気になるけど。でもメイドさん、だと思う。
「あの、」
アナタはどこのどちら様と訊こうとしたら口に何か放り込まれた。なにこれ、肉まん？
「今日の朝ご飯兼お昼ご飯兼おやつはエリーゼさんお手製の中華まんですよ」
ふむ。中から肉汁が溢れるジューシーな一品。でも特に美味しくもなく不味くもなく普通。コンビニで食べる百円くらいの肉まんと違いが私みたいなジャンクフードに馴れてしまった現代っ子には分からないわ。
「どうですか？」
「喉が渇いた」
「あ、はい。どうぞ」
と、渡されたのはきんきんに冷えた缶コーヒー。たぶん味を訊かれたのだろうに飲み物を要求した私も私だけど、肉まんにコーヒーかよ。しかもブラック。飲めねーよ。
「本当は烏龍茶でもあればよかったんですけどねぇ……」
「同感ね」

やっぱり中華とくればコーヒーよりも烏龍茶。ついでにこれも肉まんじゃなくてあんまんだったらなお良しだ。
「まあ、ないものはしょうがないのです。秋穂様、中華まんもう一つどうですか？」
「ん。もらう」
「はい。どうぞ」
「ありがと。……ああ、あとそれからアンタだれ？」
「はい？　エリーゼさんですよ？　知りませんでしたか？」
知らんわ。
「今日からここでお世話になることになっているはずの家政婦さんですよ？」
だから、知らないってば……。

とりあえず、お互いによく状況が色々とわからな過ぎるので一回お茶でも酌み交わしつつ話してみることにした。
のだが、
「だから、エリーゼは今日から秋穂様のメイドさんなんですってばぁ」
さっきからコイツはこれしか言わない。
とりあえずわかったことは、このメイドが自称私の家政婦でメイドなのだということとエリーゼという名前だということ。
なんかものすごくうさん臭い。
「うさん臭くなんてないですよぅ。エリーゼはちゃんと旦那様に雇われたメイドで家政婦さんなんですってばぁ……」
「だからそれがうさん臭いっての」
あの実の娘である私ですら情け容赦なくけなしまくる鬼畜生がそうほいほいと赤の他人であるようなメイドを頼んだりなんてするもんか。絶対に何かの間違いに決まってる。
「そんなことを言われましても……」

「そんなことでもないわよ。それにうちに家政婦を雇うような余裕なんてあるかもしれないけどないわ」
「そんなぁ……」
実のところよく知らないけど。
「とにかくっ。アナタがうちの親父に雇われたというのはたぶん何かの間違いです。うちはメイドだか家政婦だかを雇うつもりはありません。もちろんお給金みたいなものなんて出せません。帰って下さい」
「そんなぁ！？」
「お引き取り願います」
「ではではっ、無償でもいいのです！　せめて邪魔にならない程度に置いてくださるだけでも……っ！」
エリーゼさんは私の足元にしがみついているような格好で土下座した。ううむ。金髪で風俗っぽいメイドさんが土下座ってなかなか見られない光景じゃないかしら。
「お願いですからぁ……！」
「……うるさい」
この割とシュールな眺めにもいい加減に飽きてきた。それにしつこい。人がせっかくやんわりと優しく外面よく接してやってんのに何だコイツは。いい加減にしやがれ。
「どうか！　どうにかぁ……！」
「アンタね……」
懇願する声を上げ、いっそう低く頭の下がるエリーゼさん。うぜえ。
「お願いですから！」
「アンタね、それしか言えないわけ？」
「っ……」
あら。何か今言った？
足元で下がっている金髪頭に足を乗せてうりうりと踵で弄るも、エリーゼさんは文句の一つも言わない。

なんかなー。踏み心地が思ったよりもよくて、私ってば何だかいけない気分になっちゃいそう。困ったわ。子供とご老人と可愛い女の子は苛めにくいものランキングでトップ5に入るのに。

胸の奥のくすぐったい部分がちくちくと罪悪感にかられるのを感じながら、彼女、文字通り私の足下のエリーゼさんをちらり覗く。

「……ぐすっ……」

泣いてました。

うわぁい。いくらなんでも女の子相手にやり過ぎたわ。でもアレね。いちおうこの人、不審者だから。私は家主でこの人は不審者兼不法侵入者だから。たぶん。

だから、だから――いや、でもこれはさすがにやり過ぎかも？

そんなことを独りうんうんと唸りながら考えていると、足下から絞り出すような声が。

「な、何でもしますから……」

「それじゃあ先ずは私の足を舐めなさい。指先から丁寧に。足の皮がアナタの唾液で柔らかくなるまで」

あ。しまった、つい……。

「は、はい。是非やらせていただきます……っ」

やるのかよ。是非やるのかよ。

「んっ……」

そして本当に私の足を舐め始めるエリーゼさん。いや、マジかよ。

これは本当にいったいどうしたものだろうか……？

DOUSHITAMONKA？（上）（後書き）

秋穂様に踏まれたいっ！

「で、秋穂ちゃんは見事に女子高生から女王様へのランクアップを遂げたわけですか」

誰が女王様よ。

別に私はＲＰＧのゲームキャラクターでも安っぽい王道漫画のヒロインでもないため、ランクアップなんて大層なものはできないししたいとも思わない。私はあくまで普通の女子高生なのだ。

だというのに、たまたま今日エリーゼさんとやらが来た今日という厄日に遊びに来てしまった、ガリガリに痩せた眼鏡ときっちりと分けられた七三分けが妙に似合っている近所のお兄さん、松竹（まつたけ）昭（あき）文（ふみ）は「鞭とかロウソクとかボルテージ姿が似合いそうだよね」なんて失礼なことを声に漏らしながらしきりに頷いている。

何だか勝手なイメージを付けられて、しかもそれが先行してしまっているのが腹立つ。

文句の一つでも言ってやろうかと思ったが、客が来てもさっきからずっと私の足を舐めていたエリーゼさんがいきなり立ち上がったもんだから、私は出かかっていた文句を飲み込んでいた。

「あ、秋穂様……」

「あによ」

「あの、私はいつまでお舐めしてれば……」

客、しかも男が来て今さらに恥ずかしくなったのか、エリーゼさんはそんなことを言い出してきた。もとはと言えば、コイツのせいで私はいらぬ誤解を受けているというのに、聞き方によっては誤解にさらに箔を付けるようなことを言っちゃってくれてるのかしら。

まったく。
「あ、あの……秋穂様……？」
「あによ？　何か文句あるの？　つーかアンタ舐め方が下手よ、アンタのよだれで足がベタベタになっちゃったじゃない」
「も、申し訳ございません……っ」
「謝ってる暇があったら早く、これ、何とかしなさい。気持ち悪いったらありゃあしないわ」
「も、申し訳っ……」
ああ、もう。何だかコイツもいちいち腹立つなぁ。さっさと汚れた足をその辺にあるティッシュか何かで拭けばいいだけなのに、謝ってばかりでいちいちやることがとろい。
「ほら、もういいから。……とりあえず、そこに四つん這いになりなさい。座るから」
「……はい」
少し驚いたような顔をした後、エリーゼさんは素直に床に四つん這いになった。だから本当にやんのかっての。
自分から言ってしまってしかもやられてしまった手前、まさか今のなしというわけにもいかず。私は四つん這いになっているエリーゼさんの背中に腰掛ける。下から呻くような声。まるで私が重いみたいじゃない。
「えっ？　え、秋穂様何をやって……！？」
ちょっとした気紛れと八つ当たりと意地悪ついでにスカートをめくったらエリーゼさんが何か喚いてる。うるさい。
スカートの下は紫のレースのガーターベルト。うわぁ、ますます風俗っぽい。風俗の人達がどんな下着を穿いてるかなんて知らないし、別にそんなのはどうでもいいけど。
それよりも、今は足がベタベタで気持ち悪い。
めくり上げたエリーゼさんのスカートで足を拭く。最初は私のお尻の下で何か言っていたエリーゼさんだがあんまりぎゃあぎゃあとうるさいので肉付きのとても良いお尻を抓ったり叩いたり、そうし

ているうちについには何も文句は言わなくなり、聞こえてくるのは熱っぽい吐息だけ。
「よし。綺麗になった」
足の先から纏わりついていた不快感はよだれと一緒に払拭されてさっきよりは幾分マシだ。代わりにエリーゼさんの短いスカートには何だか粘っこい染みができてしまっているが足が綺麗になったのでよしとしよう。
「さて、と……。本当にどうしたものかしらね。まさか家にエリーゼさんをこのまま置いとくわけにいかないし」
エリーゼさんの上で胡座をかきながら少し考える。マジでどうしたものか。
「……そうですね。秋穂ちゃんがサディストっていうのはよくわかりましたので。とりあえずそのメイドさんの上から退いてあげてそれからもう一度ちゃんと話を聞いた上でご両親と本当に家政婦なんてのを雇ったのかとかの連絡をしてみては……」
「……なるほど」
でも何で昭文さんは前屈みになっているんだろうか？
まあ、そんな些細な疑問は心の隅に投げ捨てて、昭文さんの進言通りに本当にうちに雇われているのかエリーゼさんにうなじや耳や胸を弄くりながら身体に訊いてみる。
「で、ですから……間違なく、七草様のお宅で……あっ……だ、ダメです、そこは……ダメですよぅ……」
話だけではやっぱり信憑性なんかはないが、どうやらエリーゼさんの雇主は七草さんで間違いではないらしい。
いやいや、でもあの鬼畜で他人が大っ嫌いなひねくれものの親父さんに限って家政婦さんだなんてたいそうなものは……
「そんなことを今さらぐだぐだと言っててもしょうがないでしょう。とりあえずご両親に連絡して訊いてみて下さい」
「んー。連絡、連絡か……。お母さんじゃダメかしら？」
「ダメってことはないでしょうけど、この人が雇ったのは旦那様だ

って言ってたのなら夏彦さんに訊いた方がいいんじゃないですか？」
だよね。
「じゃあ、あれよ。昭文さんが親父に訊いてよ」
「嫌ですよ。めんどくさい」
ばっさりと断られてしまった。
「なんです？　自分の父親でしょうに、夏彦さんのこと苦手なんですか？」
「うん」
がっくりと肩を落とす昭文さん。
だってしょうがないじゃないか。いくら実の父子だといっても苦手なんだからしょうがない。別に嫌いというわけではなく、むしろ私個人としてはけっこう好きな部類の人ではあるのだけれども、ただ単に苦手なのです。なんとなく。
「あのね、秋穂ちゃん……君ら実の親子でしょうに……」
「そうよ」
「それなのに、好きだけど苦手な人だ、ってどんな複雑な親子関係ですかアンタら」
何だかだんだんと言葉遣いが乱暴になってきたけれども、事実そうなのでなんか反論し辛い。
でも、ま。たしかに複雑な感情を私は抱えていて、あの人はそんなこと微塵も抱えてなくとも、今さらそれを他人に言われたところで、だから何よとしか言い様のないのです。他人が口を挟めるようなやわな父子の絆ではないのですよ。
「……なんか無茶苦茶言ってうやむやにしようとしてない？」
「ぎく」
「いや、ぎくじゃねぇよ。途中から話がだんだんおかしくはなってたけどお前は親に電話の一本もできない馬鹿なお子様かコラ」
ついには言葉遣いが近所のちょっと年上のお兄さんっぽくない乱れた言葉だったけどその通りです。はい。
怒ってしまって何だかちょっと怖い昭文さんを尻目に。私はしぶ

しぶと親父に電話をかける。
「もしもし。親父さん？　んー、私ー。わーたーしー。んん？　詐欺？　違うわよ。アンタの娘の秋穂さんよ」
相変わらず無愛想なうえに洒落の通じない。
苦手なんだよなー、こういう親との電話って。
「……うん？　あー、いや、別に特にこれといって用があるわけじゃないんだけど……まあ、あれよ。何でもなかったら普通に聞き流してくれて構わないわ。親父、アンタ、まさか家政婦だかメイドなんかをやとったりなんかは――……は？」
いや、今なんつった……？
「ごめん。親父、ちょっと私ってば急に耳が悪くなったみたい。もう一度言ってくれるかしら？」
そして、もう一度。
ハスキーで通る渋い声が。

――だから拾ったって。

DOUSHITAMONKA？（下）

「いったい何がどうなって――……どういうことになってんのよ……」

わけがわからない。

とにもかくにも、こぼれた水を掬うなんてことはできない。なってしまったものはしょうがない。あきらめよう。それしかない。でも、でもだ。人間はこぼしてしまった水で汚して困ることができてしまうようにできている。

なんというか、ちょうど今そんなことを真面目に考えてしまうような、そんな困った状況。

「だから、本当に旦那様に雇っていただいたんですってば」

「……」

……ええ。そうね。

それは間違いないみたい。

さっき電話で親父から聞いたわよ、エリーゼさんが前に働いていた屋敷でお皿を棚ごとぶち壊してクビになって途方に暮れていたところをたまたま通りがかった私の優しい優しい親父様に拾われて無休で雀の涙よりも軽そうな給金で働かされる予定だなんてあまりに不憫なお話を。

なに？　その変な現代っ子向けのコメディ漫画みたいな展開。お皿って棚ごと壊れてしまうようなものだったの？　初耳ね。

このままエリーゼさんを追い出すのはたぶんというか、赤子の指を折るどころかシャープペンの芯を折るよりも簡単そうだけれども、それだとあまりにエリーゼさんが不憫すぎる。彼女をうちに置くく

らいは許そう。どうせ給金を払うのは親父だ。
だから、ここまでは別によしとしよう。問題はそれからだ。
明日から親父は単身赴任するということが決まっていて、お袋さんはそれについて行く予定。ってのを、何で私は今の今まで知らなくてこっちのメイドだか家政婦さんが知っているわけ？　おかしいじゃない。普通そういうことはこれから置いていかれてしまう実の娘に話しておくような重要なことなんじゃないだろうか、どう考えても。
「だから、そんな秋穂様と春霞様のために優秀なメイドの私が雇われたんじゃないですか」
皿割ってクビになった使用人のどこが優秀なのよ？
「ってゆうか……単身赴任して、家に残るのは高校生が二人になるから家政婦一人拾ってきたって、いったいどんな笑い話だっていうのよ……」
つまりは、そういうこと。
これからしばらくはあの鬼畜親父と万年発情糞母上がいなくなって、私と兄さんだけの甘い生活が始まる、はずだったはずなのに……。
エリーゼさん。彼女という賞味期限が三ヶ月前くらいに切れた未開封のポン酢みたいな不安要素たっぷりの調味料が私と兄さんの甘くなる予定の生活にものの見事に入り込んでこれからどうなってしまうのだろうかなんて不安を煽りまくったりなんかしてくれちゃうのだ。
「……なんというか、大変なことになったもんだね」
昭文さんは、私をひどく哀れむような目で見ながらそう言った。
微妙に空気が読めないらしいエリーゼさんは、その昭文さんの言葉を自分に言われたかのように一度だけ噛み締めるように頷いた後、
「だからこそ、私はここで働くのです。ですから、秋穂様、どうかご安心下さい」
彼女は恭しく腰を折った。

私はそれにつられて一礼するも、不安はどうしても込み上げる。

……ってゆうか、安心なんて、できるわけがないと思う。

なんとなくだけれども……。

DOUSHITAMONKA？（下）（後書き）

どもども。作者です。いきなりですが前回の後書きのことについては忘れて下さい。私も疲れていたんですよ。今の辛い現実に。たぶん。

まあ。そんなことはさておき。今回のお話でございますが、まさかの新キャラ登場。しかもまだ出たことないのに糞とか鬼畜とか言われてる親父さんお袋さんがいなくなってしまってわぁい自宅に私と兄さんだけの二人の愛の巣出来上がりじゃんイエイっていう展開だったはずなのにまさかの第三者が登場ついでに近所のお兄さんまで登場というベタなコメディの展開に走ってるはずなのに何か違くない？　ってゆうお話でございます。

次回はそんな秋穂ちゃんの生活一日目について――

は書きません。

普通に書きます。普通に秋穂ちゃんが学校で頑張るお話を書きたいです。いや、本当に。

「……というわけで、家でメイドさんを雇うことになったのでした。めでたしめでたしめでたくもなし」
「……なに、そのアニメ？」　柔らかな微笑みとともに訊かれてしまった。

純粋無垢な遊良の反応に癒されながらやっぱり普通はそういう反応がかえってくるわよねなんて現実を知らされるという飴と鞭。
今朝。エリーゼさんに朝の五時なんて朝の早いご老人達ですら起きているのかどうなのかあやふやな時間に起こされてしまった私は、ホームルームが始まるまでだいぶ時間に余裕を持って朝一番に登校し教室で一人不貞寝していたのだった。そして、似合わないことに風紀委員だったらしく朝から服装チェックに繰り出す予定だった遊良に教室で驚かれ、眠い眠たいと目を擦りながら朝がこんなに早かった理由を話して、飴と鞭をいただき、ため息。
「嘘だと思うなら笑いなさいな。遊良になら笑って許してあげるわ」
「……え？　まさか、本当に……？」
こくんと頷く私。一瞬にして遊良の笑顔が凍り付いた。
「ええ！？　う、嘘だぁ！　今時メイドさんなんて……」
「嘘だと思うなら今日の帰りにでも家によって行く？　本当に風俗っぽいエロチックな格好したメイドさんが雀の涙ほどのお給料で一生懸命働いてくれているわよ」
昨日、けっきょく私が反対したり賛成したりするまでもなく、あの馬鹿両親のおかげで七草家に雇われることとなった家政婦ことメ

イドのエリーゼさんは、雇われた初日だというのに昨日から家事全般をそつなく無駄なくこなしてくれて、夕ご飯には『エリーゼさん歓迎会』と自分の歓迎会を自分で開いてくれたのだった。
　エリーゼさんのその一日の働きぶりは無駄に料理の豪華だった歓迎会を除けば、兄さんはもちろん、私も文句を付ける気にもなれず、エリーゼさんは七草家に迎えられ、七草家唯一の大人ということで頑張ってもらうこととなり、今日も元気に働いている。
「へー。一度見てみたいな、本場のメイドさん」
　興味津津といった感じでしきりに頷く遊良。あれは本場のといっていいんだろうか、見た目はいかにもイメクラっぽくてあれなんだけど……。
「いいなぁ、メイドさん。いいなぁ……」
「……」
　何だか遊良が目をキラキラと幾千の星よりも眩しい輝きを抱いているため、そんなことは言えない。だってこんな可愛い女の子の夢と希望は今にも忘れ去られてしまいそうな日本のトキよりも天然の記念物だから。
「て、そういえば遊良、メイドもいいけど、風紀委員の仕事はいいの？　何か校門に人が並び始めてるけど」
「え？　あ、ああ！？」
　思い描くメイドさんに気をとられてでもいたのか、わたわたと面白く慌てふためく遊良。ああ、もう可愛いなぁ！　本当にっ！
「あ、ああ、じゃ、じゃあ、行ってくるね！　また後でね……っ！」
　遊良はそう言って、あたふたと手足をばたつかせ机やイスにぶつかったり足を引っ掛けたりと転びそうになりながらも何とか転ばずに走って教室を飛び出して行ってしまった。
　私はそんなとびきり可愛い遊良を手を振って見送りながら、頬が緩むのを覚える。いやぁ本当に朝から良いものを見れたわ。
　遊良が風紀委員の朝の服装チェックに行ってから、私はまた教室

で一人になっていた。
時刻は現在七時半を少し回ったところ。ホームルームまではまだ一時間はある。遊良はいつもこんな朝早く登校しているのかしら、今日の私はそれよりもさらに早かったけれど。
いつまでも一人教室にいて暇でしょうがない。不貞寝にももう飽きてしまった。続きは今日の一限の古文の時間にでもするとしよう。
そう学生としてはダメな予定を心に決めて、外を眺める。外、校門には何人かの生徒が並んで列をなして登校してくる生徒達の持ち物や服装についてチェックしている。とはいえ、うちの高校はいちおう指定の制服はあるものの、基本的には私服でも大丈夫なんだというじゃあ何のために制服なんて指定しているんだろうかなんて高校のためあまり登校する生徒のチェックなんてものはいらないと思うのだが、決まりごとなのだろう。風紀委員はおろか、チェックされる側の生徒達も特に何も文句がないらしく、いつまでも特に意味を持たない朝のチェックは続くのだ。
八時近くになると登校してくる生徒達もだんだんと増え始め特に意味もなく風紀委員達の動きも活発になり始めてきた。
「……あら」
あの見るからに一生懸命で他の風紀委員と比べて頭一つ分くらい小さいのが遊良だろうか。他は知らない。
ここから眺めていると、何だかあの小さな姿がものすごく愛らしくて思わず頬が緩む。ああ、もう遊良を見てると退屈しないわ、本当に。
遠くからでも愛くるしい遊良を見守りながら一人和んでいると、スライド式の教室の扉が開く音。どうやら私以外の人間が誰か教室に入ってきたらしい。
私がそれには目もくれずに、校門の方を眺めることに没頭していると、
「あら？　七草さん」
「きゃあ！？」

見知った顔がいきなり外を眺めていた私の顔の前へと横から覗き込むように現れ、私は思わず似合わないような悲鳴を上げてしまう。
目の前には、同じ女としても綺麗だとなぜだか素直に納得してしまう仮面のような顔。羨ましいくらいに透き通る白い肌。本職のモデルでもなければ裸足で逃げ出してしまいたくなるプロポーション。引き込まれてしまいそうな黒目がちの大きな瞳。
そいつ、乃木（のぎ）　晶（あきら）は。才色兼備。眉目秀麗。ミスパーフェクトの生徒会長。教師生徒を問わず支持率が高く、たしか入学して一年生で生徒会副会長。二年生に上がる頃にはすでに生徒会長へと上り詰め、今年、彼女は三年生となった今でも生徒会長として活躍している、言わば有名人だ。
そんな天上人がいきなり覗き込んできたものだから、私はびっくりして思わず声を上げて身をひいてしまった。
「あらあら。随分な挨拶ね」
うふふと微笑む会長様。
やっぱり、というか、なんというか、
なんとなく、私はこの会長様が苦手だ。
なぜなら、
「未来のアナタの旦那様を前にいつまでもそれでは、アナタ大変よ？　ねぇ、お嫁さん？」
「誰がアンタの嫁さんよ……」
いつもこんな調子。なぜか私が嫁。会長が旦那様。いや毎回思うんだけど、何でよ？
「それは私とアナタが結ばれる運命だから」
本当にいつもこんな調子。どうやら会長の中ではそれが運命であり絶対であるらしく。私は入学して以来ずっと彼女に付きまとわれながらの学校生活を送っていたりする。
「本当に迷惑……。そんな運命なんか糞食らえよ」
「ひさしぶりに二人きりになれたっていうのに、つれないことを言うのね」

別に女二人がそろったからといって何だというのか。
ありったけの嫌悪感を込めて言ってやったというのにまるで堪えたという感じがしない。それどころか、何だか会話が噛み合ってもない気がする。
会長はやれやれとわざとらしく息を一つついて肩を竦ませた。何だかその様さえも演技掛かっていて格好よく見えるもんだから嫌になる。
「ツンデレはいいけど、言葉が汚いのは女の子としてどうなのかしらね」
「いいじゃないのよ私はこれが地なんだし。あとツンデレ言うな」
「ダメよ」
「……どうして？」
「アナタは私のお嫁さんだもの」
……いや、だからどうしてよ？
毎回毎回、何だって私がアンタのお嫁さんなどと呼ばれなくちゃならないのだろうか。アンタが何の衒いもなく堂々と普通にそう言うものだから影では私と会長の百合説だとか。創作研究部にいたっては私と会長の絡みを描いた同人誌まで作られているらしいくて迷惑極まりないというのに。
「そんな連中気にすることはないわ。放っておきなさい」
私だけでなく自分もそれに関係しているというのにその言い様。ってゆうかその原因はアンタなんだけど……。
そんなことは言っても聞き入れてもらえるわけもなく、それどころかまた放っておきなさいと手厳しいことしか言われなさそうなのでもうだんまり。がっくり。せめてあの濃厚な内容の同人誌が兄さんに読まれないことを祈るしかない。遊良はもう知ってるらしい、さすが腐女子。本当に泣きたい。
「そんなに嫌なら創作研究部を潰して一井さんも退学にさせてしまおうかしら？」
「創作研究部は潰してもいいけど、遊良を退学になんかさせたらア

ンタをぶん殴る」
　ってゆうか、いくら天下の生徒会長様とはいえ本当にそんなことできるものなのだろうか？　いや、でもこの会長なら本当にできてしまいそうだけれど。
「冗談よ。冗談。創作研究部の方はともかくとしても、さすがに一井さんをどうにかしようなんて権限は私にはないわ」
　待て。つまり創作研究部の方はどうにかなるのだろうか。だとしたら早々にあの変態供を潰してほしい。
「まあ。今はそんなことよりも、七夕さん、アナタ私に何か言うことはない？」
「ない」
「本当に？」
「ない……はず……」
　詰め寄られて少し自分を疑ってしまった。恐るべし生徒会長！
「……そう」
　目の前の作り物染みて調った顔が私に詰め寄るように近付く。会長は私を逃がすつもりなどはいっさいないらしく、顔を両手で掴んで離さない。そしてそのまま。本当に何か言うことなかったかなんて疑心暗鬼に陥っている間に引き寄せられて――、

ちゅっ。

　唇に柔らかい感触。……いや、つーか、オイ……
「ごちそうさま」
「――――」
　目と鼻の先で心底うれしそうに微笑む会長。
　間違いない。今の。キス。接吻。誰と？　会長と、私の……。
「ぎにゃあああああああああああああああああああああああ

ああああああああ！？」
　キスですよ！？　キス！？　会長と！　女の子同士で！　いや、いやぁそれよりも！？
「私のファーストキスがあああ！？」
「あら？　そうなの？」
「そうなのじゃないわよ！　そうなのよ！？」
「じゃあ私はアナタの初めての人なわけね」
　そうだけど！　そうだけど何でアンタはそんなにうれしそうな顔してくれちゃってるわけ、ねぇ！？
「それじゃあね」
「ちょっ、待ちなさいよ！」
　ショックの大きさにうなだれる私が止める間も無く、会長は半ば逃げるように教室を出て行こうとした。
　しかも去り際に、
「ああ、それから。少しくらいの浮気は許すけど、あんまり行き過ぎると私も怒るわよ」
　なんて、言い残して。
　……いや、何のことよ……？

Ｓｃｈｏｏｌ　ｌｉｆｅ　×　ｆｒｉｅｎｄｓ　×　ｅｎｅｍｙｓ（後書き）

だいたい一ヶ月ぶりに書かせていただいております。アリスでございます。

今回のお話でとりあえず予定していたキャラは全員でてきたりなんかしてるわけですが、ここまで来るのに長い時間が（汗）

とにもかくにもこれからまた書ける時にかけたらいいな、なんて思ってたり。

ついでに次回『Ｏｕｒ　ｓｃｈｏｏｌ　ｌｉｆｅ』もお楽しみ？

School war for you（上）（前書き）

あ。明日テスト……

School war for you（上）

「バイオテロられた……」
「……そうなの？」
「やられたのはキスだろ？」
「そうなの！？」
「違うわ……テロよ……」
「いやいや。やられたのはキスでやったのは会長だろ？」
「そうなの！？　秋穂ちゃん本当に！？」
「……」
「どうやらぐうの音も出ないらしいな」
「わー。本当なんだぁ……」
「……ぐう」
「しかしまぁ、たかだかキスくらいで随分と凹むのな。お前さんらしくもない」
「そうだね。秋穂ちゃんってそーゆうの慣れてそうなのに」
「……二人とも、アンタら私を何だと思ってるわけよ？」
いちおう言っておくが、私はそんなに軽い女じゃない。むしろ図太く一途な女の子だ。そんな誰彼かまわずキスを許す気なんてまったくないし、金を出されたってゴメンだ。兄さんは別だけど。
だというのに……
「バイオテロられたぁ……」
「またそこに戻るのか」
「ファーストキスは大切なあの人と決めていたのに……っ！」
「けっきょくそれなんだ……」

呆れたような顔をする香緒里と遊良。いや、ファーストキスはとても大切なことですよ？
そんな乙女理論を二人に今この場で言ってもしょうがないので机に突っ伏す。
「はじめての相手があの美人の会長ってゆうのは羨ましいことだと思うんだけどなぁ……」
「どこをどう見ても羨ましくなんかないわよ……」
小動物的に可愛らしく純粋な瞳で突然なにを言ってくれちゃうんだろうかこの娘は。相手はたしかに美人ではあるけれども、女だ。そして私も女の子。はじめての相手が女なんてトラウマもいいところじゃない。
「……ってゆうか、はじめては兄さんって決めていたのに……！」
「あー。やっぱりそこなのな」
「秋穂ちゃんらしいというか何と言うか……」
香緒里は「はいはい。わかってますよブラコンが。ワロスワロス」なんて言いながら息を吐き。遊良は何とも複雑そうな顔で微苦笑を漏らしていた。ところでわろすって何よ？

「あ。そういえば、香緒里さんやい」
「ん？　何だよ秋穂さんや」
「何でアンタは私が受けたバイオテロの内容と主犯を知ってるわけ？」
そういえば、まだ話してなかったはずなのに。
どうしてあの忌々しきバイオテロのことについて香緒里が知っているというのだろう？　どっかから見てたわけ？　だったら殴る。
「んー。見てたってゆうか、いや、見てなかったんだけどさー」
「じゃ何で知ってんのよ？」
「聞いたから」
「聞いた？　誰から？」
「会長から」

「…………今、何と……？」
「会長から聞いた」
「……わんもあぷりーず」
「かいちょーからきいたー」
「会長おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」
まさか校内中の連中に言い触らしているわけじゃないでしょうね……。
朝の私の唇へのバイオテロに続いて、今度は環境に攻撃を仕掛ける無差別テロか。洒落にもならないわ……！
「大丈夫」
「何がよ！？」
「聞かされたのと聞かされる予定なのはあたしを含めたお前さんの特大の猫が剥がれた顔を知ってるやつだけらしいから」
「全然大丈夫じゃない！？　それ全然大丈夫じゃないわよ！」
つまり私と親しい人にだけってことでしょう？　つまり兄さんを含めて！　それは大丈夫だとか大丈夫じゃないとか以前に死活問題に発展しかねないじゃない！
今は昼休み。果たしてあの会長がどこの誰にどう言い触らしまくっているのかは知らないが、早く止めないと最終的には口コミだけで学校中に伝わりかねないわけで。即ちそれは兄さんの耳にも。
つまり今が昼休みとはいえども私にこんなことをする暇があれば、兄さんに会長のテロ行為が及ぶ前にそれを防がなくてはいけないという使命がたった今できたわけで――。
「あ、ちょっ！？　秋穂！　アンタどこに行く気よ！？」
いきなりガバーッと身を起こして、教室を出て行こうとする私の背に香緒里が訊く。
どこに行くって？
そんなのは決まってる。

「ちょっと会長をぶん殴りに」

にっこりとおしとやかに笑って、私は言ってやった。

ただし、今の私の顔は兄さんや遊良には見せられないようなものだろう。

その証拠に、香緒里は引きつった顔のまま、手を振って私を見送ってくれたのだから。

そう。せっかく、こころよく、見送ってくれたのだ。

目をつむって。

つまり了承。

オーケー私。

だから私は、アイツを迷わず思いっきりぶん殴ろうと思う。

オーケー私！

Ｓｃｈｏｏｌ　ｗａｒ　ｆｏｒ　ｙｏｕ　（上）（後書き）

ども。アリスでございます。

最近は寒くなってきたため布団から出るのが億劫でケータイぽちぽちいじったりゲームしたりノートパソコンいじくり回したりそのまま布団の中でお菓子食べてたり。あ。ダメ人間ですね私（笑）

そんなこんなで少しばかり書くペースが上がるといいなぁなんて思います。布団の中から↑

さてさて。また上中下なスクールウォー貴方のためにですが、ぶっちゃっけどうなのよってゆー。

いや、まあ。それを言ったら妹系ラブコメってのがコンセプトって時点でこの小説自体どうなのよってゆー。

最近友人やら何やらに見せられた妹系ラブコメゲームやら漫画やら同人誌を見てたら不安になりました。マジで。

なんてゆうのか秋穂ちゃんみたいなの、本当にこんな妹ってどうなんだろう？　皆様ほんとにどう思います？　よろしければ皆様の意見や感想をお聞かせ下さい。

あ。それから今さらなんですが、アクセスがいつの間にか六万くらいいってました。いつも読んで下さる皆様へ、深々御礼申し上げます。

School war for you（中）（前書き）

いろいろと忘れてました（笑）

School war for you（中）

生徒会室に殴り込みに行ったところ、生徒会室には鍵がかかっていた。ドアに耳を当てて確認したかぎり、どうやら中には誰もいないらしい。

会長はたしか三年生のはずと三年生の教室を渡り歩くもなかなか会うことができず、その間にもどこからか小煩く「七草、俺はまだ愛してる！」とどっかで聞いたような声。あの先輩三年生だったのか。

そんな声は当然のごとく無視を決め込み一つ一つの教室を覗き歩く。

「君、何かうちの教室にようでもあるの？」

三番目の教室で見知らぬ男に声をかけられた。顔に張り付けたような薄ら笑いが酷く不快だ。

「いいえ。ただちょっと尋ね人を」

「尋ね人？　この教室にいるやつなら呼んで来ようか？」

「いえ。ここにはいないみたいなので、けっこうです」

「んー……じゃあさ、」

「失礼しました」

めんどくさい。

何だか勝手に話し出そうとしていたのでいつもの通りに猫をしっかりと被って笑顔を貼り付けてそう言うと、私はその男から半ば逃げるようにその場をあとにした。

後ろからさっきの男が何か爽やかな笑みをいっそう輝かせていたり歯の浮くようなセリフを吐き続けているけど無視。なれなれしい

男は好みじゃない。それに何より今用があるのはアンタじゃない。
あくまで用があるのは会長で、これからぶん殴って黙らせなければならないのも会長。あんな男に構ってる暇なんてないのだ。

三年生の教室を一通り巡ってわかったのは、会長がどこの教室にもいないという事実。
もしかしたら昼休みということであのレズっ気に富む会長なら食堂で女の子の一人や二人でもたべているんじゃないかと思い食堂に行ってみるも見当たらず、代わりに、

「一井さんもかーわーいーいー」
「……先生、食事中くらいは静かにして下さい……」
「秋穂ちゃんと違って大人しいし。何よりその困ったような顔がかーわーいーいー」

変なのをみつけてしまった。
月見うどんをはふはふという可愛らしい擬音を立てながらすする遊良と、もうどうしようもない変態が。
ってゆうか遊良のあんなに嫌そうな顔はひさびさに見た気がする。そんなに嫌なのかしら。嫌だろうけど。
「ねーねー。あたしのものになっちゃいなよ」
「ええっ……それはちょっと……」
「あたしのものになってくれたらすっごく可愛がってあげるわよ、毎日、ベッドの中で」
「……遠慮します」
「うーん、何だかなぁ……どうしたらアナタを落とせるのかしらね……」
「どうしたもこうしたもありませんよ」
いい加減に遊良の顔も今すぐ泣けと言われたら本当に泣き出して

しまいそうなくらいに可哀相なものになってきていて、それを見ているだけでも十分に心持ち癒されはするのだけれど、さすがにそれは良心が痛み。私はそんな遊良の顔を間近で見たいついでに横槍からの助け船をだすことにした。
「あ、秋穂ちゃん……っ」
突然あらわれて遊良の隣りに座った私を見て、先生は傍から見てる分には面白いくらい動揺しながら「違うのよ！？　これは浮気じゃなくて、スキンシップついでにつまみ食いを――って違う！？　ここはたしかに食堂だけど別にそういう意味での食べるじゃなくて！」とか何とか、なんかを口走りながら否定してたりどう見ても魂胆を正直に吐き出してたりと必死なんだけど別に私はそんなのに興味はない。てか正直どうでもいい。
「でも一井さんには秋穂ちゃんとは違った可愛さがあってね……！」
「はいはい。遊良が可愛いのは前々からわかっていますから。――遊良はアナタと違ってバイでもなければレズっ気なんて一切ないノーマルですけど」
「っ……」
「それに遊良にはカッコいい彼氏さんがいるし」
「え？」
「知らなかったんですか？　先輩ですけど。有名な人だからきっと先生も知っているはずですよ？」
「どんな？」
「武蔵先輩。知りません？　あの身体が大きくて、カッコいいけど少し顔の怖い」
「……知ってる。もうめっちゃ噂されてる、すごく聞かされているわ」
「でしょうね」
「あの、あのね。いちおう訊いておくけど……、まさか、あの九条君とか紫藤さんみたいなのとお友達の……？」
「はい。その武蔵先輩ですね」

問題児、の友人、武蔵先輩。
野性味あふれる身長ニメートル近くの巨漢。たしかにかっこいいけどめっちゃ強面。すごくピュアに優しい人だけど、見た目ヤの字の人もビックリの迫力。しかもとって付けたような広島弁を使うものだからもう、仁義なき戦いなんてフレーズが似合ってしまう好青年。趣味はお菓子作り。料理。掃除。編み物。
「ゆ、指詰められるのかしら……」
詰められねーよ。それじゃ本物のヤの字の方じゃない。
何だか知らないけど、先生はそう言ってテーブルにうなだれて青い顔をしながら脂っぽい汗で額を濡らして呻き、何かの答えにぶち当たったのか、どこか愕然とした様子で遊良を指差して言った。
「……一井さんって、もしかして極道の女……？」
何でそうなる。
「……ええっ？」
遊良が困ったような悲鳴を上げて私を見る。可愛い。可愛いんだけど私を見ないで早く否定しなさい。
「どうなの、一井さん」
「ええっと……じゃあ、そんな感じで……」
「おい」
今、先生が遊良の襟首引っつかんで強引に言わせたように見えるけど。ってゆうか本当に否定しようよ、遊良ちゃん。
「……つまり一井さん実は怖い人種の仁義に尽くして生きる人なのね……」
いや。
いやいや、この純粋養培された純情少女の遊良のどこをどう見ればヤの字の方に見えるなんておバカなこと言ってくれやがるんですか先生。
「あー……ノーコメントで」
遊良。アンタもアンタで先生のこと苦手なのはわかるけど。けど、めんどくさいからってそんなてきとーに答えないの。極道の女にさ

れるから。誰も信じないだろうけど。
「……そう」
アンタも本気で信じたような顔すんな。遊良が余計に困ったような顔してまた余計なことを言っちゃうじゃない。
「そうなんです」
「いや。だから違っ……」
「秋穂ちゃん行こ」
「あ。ちょっと」
ありえない誤解そのままに、遊良は私の手を引いて立ち上がった。そして愕然とする先生を一人残したまま、食堂をあとに。
「遊良、あれいいの？」
「何が？」
何がじゃないわよ。何がじゃ。
「何か変な誤解受けてるっぽいけど……」
「んー……いいんじゃないかな。付きまとわれるのは、その、ちょっと困るし。今さら撤回するのもめんどくさいし」
微苦笑を浮かべる遊良。可愛いんだけど、今さらりとめんどくさいって言った。
「それに、」
「それに？」
「私は清人さんを悪く言う人は嫌いなのです」
なのですって。
うわ。可愛いっ。
一度でいいから遊良みたいな可愛い娘にそんなこと言われてみたい。
「遊良みたいな可愛い彼女を持って、武蔵先輩は幸せ者ね」
他人ごとなのに思わず緩んでしまう頬を抑えつつ、茶化すようにそう言うと、遊良は照れながら「もう秋穂ちゃんのバカ」なんて言いながら私を叩いた。可愛い。可愛いんだけど私のバカさ加減と可愛い彼女持ちは関係なくない？

「ところで秋穂ちゃん、どうしてここに？　今日はメイドさんが作ってくれたお弁当があるから食堂はパスなんじゃなかった？」
「ああ、実はお弁当もパスして探し出して撲滅しなきゃいけない輩がいやがるのよ」
少し引きつった顔をして遊良が、私からひいた。
自分で言うのも何だけど間違ったことは言っていないはずだ。というかアイツは殺す。

「それって、もしかして私のことかしら？」

瞬間。
耳に当たる生暖かい吐息。背筋にぞぞぞっと走る悪寒。
「な、なっ、なな何！？」
「あら。いい反応」
無様に慌てふためきながら耳に息を吹きかけられたことを理解。
やったのは間違いない。
「会長！」
半ば突き放すようにして会長を押しのけ、指を突き付けて言ってやる。生徒会長、乃木晶。
「秋穂ちゃんが私を探してくれてるというから来てみたら、随分な扱いね」
やれやれなんて大げさに溜め息を吐いて応える生徒会長、ものすごく余裕しゃくしゃく。すっごくムカつく。
「それで？　私に何か用？」とどうせわかっているくせに訊いて「私と秋穂ちゃんとの朝のディープキスのことについてなら却下よ」
「――――」
なんて、御丁寧に話の落ちまで付けてくれて――。
周りざわざわ。
私赤面。
なのに、――会長は平然。

「あら？　あらあら当たり？　だったらここで話すには少し恥ずかしい内容ね」
ついて来なさいなんて言いながら会長は私の襟首を掴んで、私は母猫に噛まれた子猫みたいに無抵抗に引きずられて食堂をあとにした。
さらに増して向けられた視線の数々に目を白黒しながら。どうにも働かない頭で、何でこの人こんなに平然としていられるのかを私は真剣に考えながら。
なされるままに。その場をあとにした。

School war for you（中）（後書き）

前々回のあとがきでの予告タイトルと前回出したタイトルが違う件について。間違えました。ええ。もう、素で。まことに申し訳ないっ。

School war for you（下）（前書き）

もうどれくらい書いていなかったのか…

School war for you（下）

「……？　それで？　そっからどこがどうなって会長はそんな血の海でぶっ倒れてることになるわけよ？」

私が覚えている限りの事を一部始終を話した後、そう訊かれた。

「私が知るか」

そんな言葉にありったけの気分の悪さを込めて一睨みかましてやると、柳生は「うわ。こえーなぁオイ」なんてわざとらしく肩をすくめて見せた。

肩口辺りでバッサリと切られた赤みがかかった茶髪。右耳に安全ピンが三つ。左にチープなロザリオ下げたイヤリングが大小二つ。制服の胸元を大きくはだけさせた特徴に困らない麗人。柳生（やぎゅう）　久兵衛（きゅうべえ）。

私達の間で一悶着あった後、この生徒会室という異界に踏み込んでしまった彼には、いったいここはどんな惨状に見えたことか。

血溜まり。顔面血塗れの生徒会長の死体。同じく血塗れの私。手に持った血塗れの細い花瓶。マジで惨状じゃねーか。

「しかもモロ七草が犯人じゃねーか」

参った。たしかに。

見るからにここは犯行現場（血塗れの生徒会室）で死体（血塗れの生徒会長）が転がってて犯人（血塗れの私）がご丁寧に凶器らしきもの（血塗れの花瓶）まで持ってるじゃないですか。

うん。どう見ても私が会長を殺ったみたいにしか見えないわ。

「――なんて。そんなわけないじゃない」

「だよなー」

しかしそこは柳生、さすがにこんな間違いやすい状況でもまったく慌てず騒がず。むしろ語尾に（笑）なんて付けそうな顔で朗らか

に笑いながら、
「どうせまた、晶の病気みたいなもんだろ？」
っんとに毎回よーなんて苦笑しながらハンカチを取り出して私に渡す。血を拭けということか。
柳生はもう馴れたようなもので会長を引っ張り起こし、意識のないのをいいことにズルズルと半ば引きずるように運んでソファの上に投げて転がして顔の上に濡らした半紙を置いた。いやいや、なんか今流れるような動作でやったけどそれはマジで死ぬでしょうよ。いや。別に会長だからいいけど。
「まったくさぁ、この会長ももう終わってんよなー」
かんらかんらと笑いながら柳生は床やテーブルを汚す血を雑巾で拭き取る。その手付きは本当に馴れたもので、業者の方も顔負け。
「ん。通販で買ったんだけど、このカーペット本当によく水を弾いてくれるんだなぁ」
主婦か。いや、主夫か。
「しっかしまぁ、今度は何してくれさったんかねー。妙に七草の服はだけてるし。あんな噂も立ってるし」
言われて気付く。うわ、ブラ全開じゃんすか。つか濡れてるし。
「まぁ、ここに連れて来られると大概こうなるわね。いったい何だというんかしら」
ため息混じりに吐き捨ててやると柳生はひらひらと手を首もとで振りながら微苦笑。
「知らない方が幸せってこともあるが、聞きたい？」
いいえ。けっこうです。
知らない方が幸せならば知らないまま幸せでいたいので全力で拒否。聞かなくたってそれが悪いことなんだろうとは予想できてるので謹んで辞退させていただきますとも。
「うんうん。七草は賢くて何よりだわ」
こいつに比べてなーなんて言いながら会長を足蹴にする柳生。アンタ本当に遠慮ないのな。

「こいつもさー、悪いやつではないんだけど中途半端にサディスティックなとこがたまにキズってやつだよな」
「……どこが中途半端よ」
会長で中途半端なんて言ったらいったいどれだけの人が世の中でサディストと呼ばれることができるのか。そいつはサディストの化身だなんて言われても過言ではないようなやつじゃないか。
あからさまにげっそりとした本気で嫌な顔を努めて作って言い捨ててやると、今度は柳生がため息混じりに呟いた。
「そこはホラ、知らないままのが幸せってやつで」
……何が？
今もしかしたら聞いた方がいいのか、なんて思ってしまったが自重。知らない方が幸せだというのだから知らない方が幸せに決まってる！　はず！
「うんうん。賢い子のがここでは長生き出来るからなぁ。七草のそういうとこ俺は好きだ」
ぎこちなさそうに片目を瞑りウインクをする柳生。似合わないことこの上ない。
「何でそこで嫌そうな顔してるのかまったくわからねーけど、そんな賢い七草さんにご褒美があります」
「へ？」
「何と、今回は生徒会から俺が直々に頑張ってきちゃいました！」
柳生が……？　あの柳生が！？
「アンタ、今日という今日は何してくれた……？」
「ええっ？　なに？　その人を親の仇か何かに勘違いしてる主人公の目！？」
「どんな目か。つーかアンタが自分から、直々に働き出してロクな目を見たこともないんだからとっととゲロりなさい！」
「……秋穂ちゃん、女の子は言葉遣い大事よ？」
「秋穂ちゃん言うな！？」
何でオネェ言葉か。

てか、いっこうに話が進まない。相変わらず掴み所がないというか、疲れる相手というか。とにかくもう嫌だ。
「もうさーそんなに慌てなくていいじゃんかよー。七草と会長の件を消すため今回俺が立てたスケープゴートは七草じゃないんだからさー」
「だ、か、ら！　それが問題なんでしょうが……！」
やっぱりか！！　という叫びよりも先に出たのはそんな言葉だった。
この男、この学園で何かと起きるものを噂を流して消してしまうのが得意だなんてどこの諜報部の回し者だと言いたくなるような男が直々に動くなんて言った時、――必ず誰かが犠牲者となるのだ。
本人いわく「やむおえない犠牲なのです」なんて言うが、どこがやむおえないのかを一冊の本にまとめて見せてほしい。
今回の件、私にとってはたしかに好都合ではあるのだが。
「それで、今回私のために犠牲者になってしまった可哀想な子は誰！？」
「そ、そんなに慌てなくとも……。首、絞まってて……言えな……」
顔が青い。どうやら首を絞めていたらしい。わざとだけど。
「アンタのせいでまた誰かが泣くことになるでしょうが！　早いとこ被害者確保してやらなきゃ可哀想じゃない！　だから吐きなさい！」
「うわぁ。七草やっさしー……待って、待って下さい。言うから！？　言うから俺のただでさえ細い首をさらに絞め上げないで！」
「だったら早く吐きなさい！」
ギブギブなんて私の腕を叩きながら、柳生は青から土気色に変わった顔を歪に引きつらせながら言った。
「会長」
「……よし。許す」
首にかけてた手を放してやると、柳生はゲホゲホと激しく咳き込みながら私を睨んだ。

私はそれを柳生が普段やるように肩をすくめて見せ、かける言葉もなく生徒会室をあとに。あの噂が消えたと柳生が言うならきっとそうなのだろうし。それならそれでここにいる意味はもうない。

ついでに、今は少しだけ気分がいいからこの気分が壊されないうちにさっさと退散を決め込んで。

さて今回、会長はいったいどんな噂でスケープゴートとされたのか。

とにかく――楽しみでしょうがない。

School war for you（下）（後書き）

もし、この作品を待っていたというなかなかの強者がいたら申し訳ねえ！

Ｅｘｔｒａ．１　わりと忙しくないエリーゼさんの一日（前書き）

書きたくてやった。
後悔はしている。
だが反省はしていない。

…（´・ω・｀）

Ｅｘｔｒａ．１　わりと忙しくないエリーゼさんの一日

「はっ。秋穂様が大変なことに！」

――なっている気がして何処か彼方に向かって叫んでみますが返事がありません。寂しいです。

「と、いいますか。そんな学校で大変なことになんてなるわけないですよね？」

御主人様、もとい雇い主である旦那様は奥様といっしょに赴任中のため家を留守に。秋穂様と春霞様は学校に行っておりまして、私、エリーゼは只今ひとりで留守を預かっております。

学校で二人はどのような時をお過ごしなのでしょうね？　何だかとても心配なのですが、たぶんこれは杞憂でしょう。秋穂様も春霞様もいきなり寄越された私を快く受け入れてくれるような人のできた方々ですから。……秋穂様は少しおてんばですけど。

「まあ、もし学校で何かあったとしても教員の方々が何とかしてくれるでしょうし。そもそも私に何かが出来るわけがありません」

と、自分に言い聞かせて私はここにいて私に出来ることを探してみます。特に何もみつかりません。何てことでしょう！

洗濯物は朝のうちに秋穂様が。洗い物は春霞様が。掃除は午前中に塵一つ残さずやってしまいましたから特にやることがありません。というか、よく考えたら御主人様達に働かせてましたねエリーゼ！

地味に自己嫌悪に落ち込んでいると、ふと空腹を覚えました。何てことでしょう。落ち込んでいる暇すらありません。

「そういえば、お昼まだでしたね」

ふと時計を見ます。ただ今１２：５８。いいとも選手権はすでに終わっております。今週は何だったのでしょうか？

「……いやいや、そんなことよりもどうしましょう」
実は私、エリーゼは料理なんてできません。見たところ、レトルトや冷凍食品はおろか冷蔵庫には食材の欠片もありません。どうやら昨日の（寝ぼけ眼の）秋穂様に（手作りと嘘を吐いて）出した肉まん（冷凍）で打ち止めだったようです。どうせなら自分で食べておけばよかったと後悔。だってけっこう美味しそうに食べてらしたのですよ？
「よし。外に食べに行きましょう」
肉まんを。なんて自分でも単純だなんて思いながら懐のお財布を確認。
五十円玉が一枚。だけ。
「……あれ？」
こんなに財布の中少なかったでしたっけ？　と小首を傾げてみますが何の解決にもなりません。
五十円玉でお昼ご飯が食べられるか、否か。否しかないじゃないですか！？
「何てことでしょうか……！」
神よ！　アナタはどれだけ私のことがお嫌いなのですか！？

◆◆　◆◆◆

「――と、いうわけでしたので」
「他に頼る宛てもなくここに来ました、ってわけですか……」
呆れたようなため息が漏らされ、私は申し訳なさに身を小さくし

ました。
「そんな困ったような顔しなくとも、……まぁ、困った時はお互い様というやつですから」
そう言って柔和に微笑んでくれるは細い体躯に眼鏡と整えられた長髪が素敵な近所の男性。松竹昭文さん。
私が七草亭にてお世話になることになってから彼には随分と助けられているような気がします。お世話になっているのは昨日からですけど。
「それにしてもまぁ、お金がないってまたベタな理由ですね」
「すみません……」
ああ、いや。なんて困ったように微苦笑しながら昭文さんは言いました。
「秋穂ちゃんも春霞君も、エリーゼさんに最低限でもお金渡してなかったんだな、と思いまして」
「ああ。そういう……」
そういえば私、お金をまったく預かっておりません。信用されてないからでしょうか。
「いや。昨日会ったばかりの他人にそこまでしてくれる程あの子達もバカじゃないか」
なんて、やっぱり苦笑して。
「それともただ単にそこまで気を回す余裕もなかったのか」
どこか遠くを見上げながら、意味深なことを仰っています。何だか格好いいのですけど、見方によっては不審者のようでもあります。
「まあ、あの子達もまだまだ子供ってことで」
けっきょく何事か一人納得したようで。昭文さんは椅子にかけていた黒いエプロンを手にとりまして。
「エリーゼさん、何か昼食のリクエストとかあります？」
「肉まん！」
私は間髪入れずに答えました。
赤いカジュアルシャツと黒いジーンズとエプロンというなかなか

お目にかかることの出来ない格好で、昭文さんはまた微笑んで「了解しました」と言って台所へ。

それからしばらくしまして出て来たのは美味しそうな肉まんと冷たい烏龍茶！

「昭文さん大好きです！」

「はいはい。僕も好きですから冷めないうちに食べてやって下さいな」

Ｅｘｔｒａ．１　わりと忙しくないエリーゼさんの一日（後書き）

なんか久々に書いててもうさすがに私なんて忘れられてんだろうなぁなんて思ってたら「待ってました」なんて嬉しいお言葉いただいて、画面の向こうでニヤニヤしてた私きめえｗ

I met SUKEBANSAMURAIGIRL.（前書き）

ニュータイプインフルエンザにかかりましたが私は元気です↑

I met SUKEBANSAMURAIGIRL.

「お主、七草秋穂だな？」
「ん？」
……。
会長のせいで居辛くなった学校をサボっての帰り道にスケバンに声を掛けられた。
うん。自分でも何を時代錯誤なコメディー見てんだって思う。でも、なんつーか、ええっと……。
「恥ずかしくない？」
「何が？」
正気か？
今時めずらしいロングスカートにマスクと凶悪な金属バットで作られた釘バット。愚神礼賛？　シームレスバイアス？　どっちでもいいけど彼女、どこからどう見てもスケバン。この春先とはいえバカも休み休み出て来い。最近はいくらなんでも多すぎだ。
「時に私の名前を知ってるようで何なんだけど、いったいどちらさま……？」
「今日は私闘故にあちき一人馳せ参じた」
人の話聞けよ。つか何人だよ、お前。
見た目はスケバン、中身はサムライってか？　んなキャラ今時の小学生にだって受けやしないだろうに。そのくせ一人称が『あちき』って。
「あー……さよなら」
バイバイと手を振って一気に駆け出す。いきなりのことに呆気に

とられたスケバンサムライガールの横を抜き去り、ついでに一発膝を狙ってロー蹴り。スケバンサムライガールが膝から崩れるように倒れる。
「なっ、待て貴様――」
「待たないわよ！　つか、お前みたいな物理的危険物の所持者は時代の波に呑まれて溺死しろ！」
現役女子高生にあるまじきローキックと罵倒を残して私は全力で走り去った。
第一印象からして最低でも準レギュラー入りしてきそうなキャラはもういらないのです！　偉い人にはそれがわからんとです！
そんで何キャラだよ今の私！

◆◆　◆◆

「待てと言ってるだろうがあああああああああああああああああああああああ！」
「ぎゃーーーーーーっ！？」
何か追いかけられてるんだけど私！？
最初のローで倒してからの私の逃げ足の速さがあれば絶対に逃げ切ったと思ってたのに。しっかり後ろから迫ってるし……！　しかもだんだん距離詰められてるし！
「助けてエリーゼさぁん！！」
えーりんじゃないから助けに来るわけないけど！
「このぉ……！」

ずざざっとコンクリートを削る音。踏み込んだ……？　何で？
つられたように振り返り、見ると。
「ま」スケバンサムライガールがなんちゃってシームレスバイアスを大きく振りかぶって、気合一閃「てええええええええ！」そのまま一気に分回して投げた———投げた！？
「危なねええええええええええええええええええええええ！？」
回転しながら高速で飛来する釘バットを恥も醜聞も捨てて道路にヘッドスライディング決めるような形で逃げる。ＵＦＯかガメラの如く回転しながら飛んだ釘バットは電柱にぶち当たり弾かれガラガラと音を立てて地に落ちて転がった。いや。マジで危なかったわ。危なかったわよ！
壁を背に上半身だけ起こすような格好になりながら私は叫んだ。
「アンタ、私を殺す気！？」
「やはりお主が七草秋穂か！」
聞いちゃいねえし！
「……ああ、もう……」
イライラ。
つーか、なんだっつーんだよ。
何の用があって私を追い回してくれやがってんだから知らないが、いい加減にしてほしい。
何かもう、平穏無事に逃げ切ろうとか思ってた自分がバカらしいし。
てか、
「で。アンタ、何なわけ？」
「やはり、あちきの見込んだ通りの……」
決めた。——コイツは殺す。
可憐な妹系美少女ヒロインにあるまじき覚悟を胸に、落ちた釘バ

ットを拾って両手で持ち上げてイチローがバッターボックスに立った時の物真似をしながら構える。
二・三度ソフトボール部の女の子のマネなんかしながら素振り。うわ。これ二の腕にけっこうクるわ。
でも、ま。これなら私の腕力でも全身使えば振り回せないこともないということがわかったわけで。
「来るなら来なさいよ。ぶっ飛ばしてやるから」
ブチ切れた私はとっても美少女ヒロインに見えないような男らしいセリフを吐きながら一本足打法の構えなんかをとってみた。
「……ほう」
不敵な笑みを浮かべ、スケバンサムライガールがおもむろに胸元に手を突っ込み何かを取り出した。
私と彼女の間の距離、三か四メートルほど。
ここからじゃ彼女が持ってるのが何かはわからない。
さらには彼女は私から背を向けて距離をとった。もう私が逃げないと踏んだのか。
間、距離にして十メートル。ソフトボールだってこんなに近くはないだろう。
そんな距離から。
彼女は何かを右手に握り、体の後ろへと回し、
そして、
右腕が跳ねて、
何かが私目掛けて投げられて――――ぽーんっ、と。
「あ」
「え？」
思いっ切り振り切った釘バットが手からすっぽ抜けてしまった。
私の手を離れてしまった釘バットは真直ぐな直線を描きながら、
「――――ぐぶぅ！？」
スケバンサムライガールのみぞおちにめりぃと直撃し食い込んだ。
スケバンサムライガール、ぱったり。顔面から地面に倒れてピク

ピクと痙攣してもの言わぬ屍と化してる。
「……ええっと……」
対して私。
「……わざとじゃないのよ？」
いちおう弁明してみる。
ダメかしら……？　ダメだろうなぁ……。

I　met　SUKEBANSAMURAIGIRL.（後書き）

皆様お久しぶりです。
ロードオブヴァーミリオン?をやりにゲーセン行きまくってたら新型インフルエンザをもらってしまいました。

体調悪いならゲーセン来んなよ！　って言いたいです。バカか私↑

熱で茹ってる頭で書いてんのでなんかもー変なんになってるかもだけどなんかもーその辺感想書いて教えて下さい。

たぶんまた明日か明後日にも書くと思うんでまたー

Lady's battle for a girl（上）

「おかえりなさいませご主人様ー！」
「エリーゼさんのバカー！？」
エリーゼさんの折り目正しく曲げられちょうどいい位置に下げられた頭に回し蹴りを叩き込んだ。
ぎゃっ、と短い悲鳴を上げて倒れるエリーゼさん。
「あ、秋穂様、何を……」
「助けに来てくれるって、信じてたのに……！」
「秋穂様……？」
実はただの八つ当たりですが。なんて言うと私の株が下がるので言うまでもなく。
エリーゼさんの頭をしたたかに（使い方あってる？）踏み付けながらしくしくと泣き真似なんかしてみる。
「あぁ……んっ……」
なんか足下から艶っぽい声がしたけど聞こえなかったことにして、ぐりぐりと下にさらに力を加えてやる。ほれほれ。
「……秋穂ちゃんにエリーゼさんは何？　まだ日の出てるうちからレズのＳＭプレイとか勘弁してほしいんですけど」
「うっさいわお客様」
ひょっこりとリビングの方から顔だけ覗かせてとても心無きお言葉を寄越してくれるお客様もとい、昭文さん。
何でこんな時間に昭文さんがうちに来てるのか知らないが、たぶん上げたのはエリーゼさんだろう。そうじゃなかったら大変だ。
昭文さんはピーターラビットのイラスト入りの水色のマグカップ

を傾けながら冷ややかな視線をくれている。ええい、様になってんなこの近所のお兄さんっ。
「てか、それ兄さんのカップなんだけど使わないでくれる？」
「ん？　エリーゼさんがお茶淹れてくれたから使ってたんだけど、客様用じゃなかったんですか」
　足下のエリーゼさんのおっぱいを足でぐりぐり。アンタ、よりにもよって兄さんのを他人に使わせるとは……！　私のでも許さなかったけど！
「……まあ、ごめん」
「いーえ。昭文さんが謝ることじゃないわ。うちのメイドのミスですもの」
　足下からやっぱり艶っぽくてさらには熱っぽさまでする嬌声が。もしかして、やり過ぎたかもしれない。
「それよか昭文さん、何でこんな時間にうちに？」
「あー……」非常に言い辛そうな顔をしてエリーゼさんを一瞥し、口を開いた「お昼ご飯のお礼にってお茶もらってた」
　他人様んとこでご馳走になってきたのかっ！
「アンタそれでも本職の家政婦なの！？」
「ヒィ！？　ご、ごごごごめんなさいぃぃぃいいいい！」
　がばぁと起き上がって泣いて逃げてくエリーゼさん。昭文さんのいるリビングへと逃げ込んでしまった。昭文さん苦笑。
「まったく……」
　もう何だかなぁ。
　エリーゼさんの泣き顔にすっかり毒気を抜かれてしまってもう怒る気にもならない。そういえばお昼ご飯どうしろとか言ってなかったから自由ってことで昭文さんとこのお世話になったあもう正当な理由考えるにもまだるっこしくてメンドー。朝から変なんに絡まれてばっかで家では八つ当たりついでで何で怒ってて頭ん中ぐちゃぐちゃしてきた。てか、八つ当たりとか悪いのモロ私じゃねーか。
「……私、」

「うん？」
「ケータイ買いに行くから」
「はい。いってらっしゃい」
「ついてきなさい。メイド」
「え……私ですか！？」
ちなみに今の会話の最後にしかエリーゼさんは口を挟んでない。
私と昭文さんの会話に口を挟むスキがなさすぎ。あとエリーゼさん驚きすぎ。
「そうよ」
「えっ。ええ……」
「ほら。早く！」
「は、はい！？　ただ今すぐに！」
あー……。
何かまだやっぱりなぁ。
馴れないというか、馴れてないというか、なんだかなぁ……。

Lady's battle for a girl（上）（後書き）

そろそろ内容的に本題へと進んでいきたいなーとか思ってたりなかったり。

Lady's battle for a girl（中）（前書き）

やあ、皆、一年に一回二回しか更新されない小説がまた来たよ！

……や、本当にすみません。毎度のことながら本当にすみません。

とりあえずバク宙してムーンウォークしてから土下座しますね！

Lady's battle for a girl（中）

「新しいケータイってなんか色々と機能が付き過ぎてて何がいいのか私にはさっぱり分からないわ」
「秋穂様、これ可愛くないですか？」
「あ。たしかに可愛い……けどワンセグ付いてないから却下」
「ええ、そんな理由で」
「何よ、お昼休みにいいとも見れるのって学生にとってはけっこーなステータスなのよ？」
「……そんな学生のステータスなんか嫌です」
「朝食はおろか昼飯さえ他人頼みのニートには分からないステータスなのよ」
「ぐ……」
「ふっ、言い返せるものなら言い返してみなさいな」
「ぅ……」
「あら？　泣くの、泣いちゃうの？　泣けば許されるとでも思ってるのかしらこのキングオブニートは」
「そ、そんなことはないですよ！　ちゃんと働いてますよ！？　メードとして！」
「転がり込んで一日でちゃんと評価されるとでも思ってるの？　一日目から失敗して私の中でのアナタの株は絶賛下落中だけど文句の一つも付けられるのかしら？」
「……うぅ……」
「言い返せないでしょうね。言い返せるような立場ならそもそもこんなこと言われないものね」
「……すみません」

「謝るくらいなら、……次はそうならないように頑張りなさい。私が、エリーゼさんを少しは見直せるようになるくらいに」
「……！」
って、違うだろ私。
なんかこう、もやもやとした鬱憤をこんなことで晴らすためにエリーゼさん連れて出て来たんじゃなくて、なんつーか、謝りたかったから連れてきたわけじゃなかったのかしら私。雰囲気的にもなんかそんな感じだったし。
それが何がどうしてこんなケータイ買いにきてなんか良さげなのすすめてもらっといてこんな上から目線でエリーゼさん見下ろすようなことになってるわけ？
「あ、あの……」
「……ん、なに？」
「あ、ありがとうございます！　私、頑張りますからっ！」
えーと……、
なじってただけなのに何で私は礼を言われるのだろうか。
まさか、そうゆう趣味？
「……まあ、いいわ。エリーゼさん、頑張るというのなら私の代わりにテキトーなケータイ選んでちょうだい。値段は新規で五千くらいまで、デザインとかどうでもいいから使い易そうなやつ」
「あとワンセグですね！」
「ええ、それでよろしく」
って、だからそうじゃなくて。
なんで私はこう、エリーゼさんにはこうも上からものを言う感じになってしまうのだろうか。エリーゼさんが初対面から滲み出るくらい下僕体質なのだろうか？
それとも私の人見知りという後付け設定がたった今発動しているのだろうか？
「秋穂様これなんかどうですか」
エリーゼさんが持ってきたケータイを手にとって眺めてみる。大

きめの画面がカシャカシャスライドする音楽ケータイとやら。うん。ワンセグもちゃんと付いてる。
「ん。いいんじゃない」
「色はどうします？」
「エリーゼさん何色がいい？」
「私ですか？　私はこの、明るい抹茶色ですかね」
「ふつーにエメラルドグリーンって言いなさいよ。じゃ、このエメラルドグリーンとブラックでよろしく」
「二つもいるんですか」
「一つはアナタのよ」
「え」
エリーゼさんフリーズ。
あれ？　ケータイ持ってなかった気がしたけど違ったかしら。
「無いと困るでしょう。今日みたいなことがあっても困るし」
「いや、でも、あの……」
「私からの就職祝いってことで」
あれば何かと便利だし、今度は助けてもらえるかもだしと淡い希望なんか描きながら。
「まあ、これからこき使うつもりでいるからいつでも私のお願いが聞けるようにちゃんと持ち歩いておきなさい」
……おい私。だから、なんでそこで素直になれなくて、だから、なんでそんなに高圧的で……
「はい。ありがとうございます！　私、一生懸命頑張ります……！」
なんでアンタはアンタで喜んでんだ！
やっぱりマゾなのかもう本当によぉ……！

Lady's battle for a girl（中）（後書き）

ごめんなさい！

バク宙もムーンウォークも出来ませんでした！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0607e/

兄妹愛とビターチョコ

2010年10月8日12時54分発行